

キャリア教育 コーディネーター事例集

2010

戸惑った。不安だった。嬉しかった。

初めて教育現場に参加した私たち。

キャリア教育コーディネーターが
全国で活躍しています。

戸惑いを感じる学校と企業の間をつなぐ架け橋の人材



コーディネーター事例紹介29

いまなぜ、
地域や企業を
巻き込む
キャリア教育が
必要なのか？

新しい価値を生み出す人材が求められる時代



経済産業省



キャリア教育コーディネーター育成・評価システム開発事業
<http://www.human-edu.jp>

経済産業省

事務局



特定非営利活動法人
スクール・アドバイス・ネットワーク
<http://www.sanet.jp>

CONTENTS

- 04 いまなぜ、地域や企業を巻き込む
キャリア教育が必要なのか?
- 06 キャリア教育コーディネーターが
全国で活躍しています。
- 08 インタビュー
戸惑った。不安だった。嬉しかった。
初めて教育現場に
参加した私たち。
- 10 コーディネート事例集紹介

企業一覧

- P12.13 株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント
- P14.15 子ども農山漁村交流プロジェクト推進協議会
- P16.17 パナソニック株式会社
- P18.19 株式会社キッズステーション
- P20.21 小樽職人の会・小樽観光協会・石原裕次郎記念館等観光施設9社
- P22.23 株式会社日立製作所
- P24.25 株式会社ユニクロ
- P26.27 アイシン精機株式会社
- P28.29 西日本旅客鉄道株式会社
- P30.31 株式会社西島製作所
 - P32 株式会社読売新聞東京本社
 - P33 積水化学工業株式会社
 - P34 焙茶工房しゃおしゃん 滝沢村商工会
 - P35 アメリカン・エクスプレス・インターナショナル, Inc.
 - P36 アデコ株式会社
 - P37 本州四国連絡高速道路株式会社
 - P38 日産自動車株式会社
 - P39 株式会社トヨタグループ
 - P40 株式会社 豊田自動織機
 - P41 大和ハウス工業株式会社
 - P42 日本ハム株式会社、積水ハウス株式会社
 - P43 有限会社ワッツビジョン、ゲンジ株式会社
 - P44 近畿日本ツーリスト株式会社、株式会社デザート
 - P45 株式会社伊予銀行(地域協力企業代表)、株式会社エアー沖縄
 - P46 沖縄ワタベウェディング株式会社



キャリア教育を受けた児童・生徒の感想

図4 勤労観・職業観の醸成

将来、働きたい(働かないといけない)と思うようになったか。

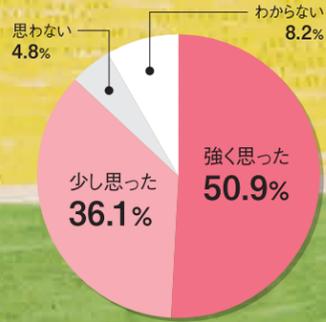
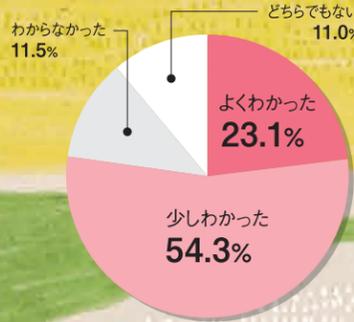


図3 学習意欲の向上

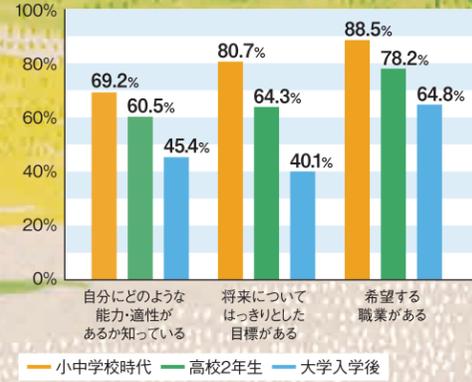
学校での学習と社会(世の中)とのつながりがわかったか。



共に平成十九年度「地域自律・民間活用型キャリア教育事業」でキャリア教育を受けた児童・生徒18,675名へのアンケート結果より

職場や社会が近づくにつれて目標を見失う若者たち

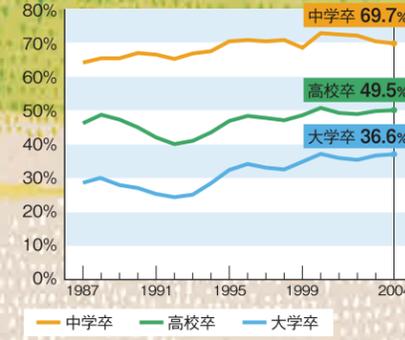
図2



(出典)ベネッセコーポレーション「進路選択に関する振り返り調査」(2005)

新規学卒者が3年以内に離職する割合

図1



(出典)厚生労働省「職業安定業務統計」より作成

いまなぜ、地域や企業を巻き込む キャリア教育が必要なのか?

新しい価値を生み出す人材が求められる時代

近年、ニート・フリーターの増大や、若者の早期離職(いわゆる「七五三問題」※)(図1)など、学校から職場への移行が大きな問題になっています。

職業的スキル向上の機会を得られなかった若者の増加は、産業界にとって大きな問題へと発展しています。また、若者は将来に対する漠然として不安だけを抱き、職場や社会に出る年齢に近づくに従い、目標や自らの適性を見失う傾向にあります。(図2)

その要因は決してひとつではありませんが、経済の急激なグローバル化や雇用環境の変化、また若者自身の生活・意識の変容が考えられます。

IT化の進展に伴い、単純作業は機械化され、仕事の複雑化・短納期化が進みました。若者には、変化に適応する力、新しい価値を創出する力、文化が異なる他社の仲間と協働できる力などが早くから期待されるようになりました。

一方で子どもたちを巡る環境も変化しています。家庭や地域社会の教育力の低下、あるいは部活動・子ども会・サークル活動などの減少を背景として、子どもが異年齢集団の中でたくましく育つことが難しくなっているのです。

※七五三問題：中卒の七割、

教育への産業界・地域の関心は高まっている

体験活動を伴う教育活動は、地域や産業界との連携・協力が不可欠です。一方で地域や産業界にとっても、キャリア教育はいまや大きな関心のひとつとなっています。地域にとって、多くの子どもや若者に地域産業を理解させ、関心を持たせることは、次世代の地域産業の担い手の確保となります。キャリア教育を通じて、地域の魅力を知ることが、将来にわたる地域の豊かな発展を実現するために重要なことです(図3・図4)。

また、産業界においても、「CSRコーポレート・ソーシャル・レスポンス(シビリティ)」企業への社会的責任の一環として、キャリア教育に協力する企業が増えています。CSRとは、自らの利益追求だけでなく、社会を構成する一員の「企業市民」として、持続可能な社会を作るための活動です。現在、環境CSRが盛んに取り組まれています。教育問題を環境問題の次の問題として捉える企業もあるようです。

最初は学校側の依頼で教育参加していたものの、今では自社独自の教育プログラムをより良いものへと発展させ、地域であるいは全国で実施しているという企業も少なくないのです。

高卒の五割、大卒の三割の人が就職してから三年以内に最初に勤めた会社を辞めてしまうこと。

教育現場でもより重視されるキャリア教育

これらの課題に対応するため、子どもへの社会的・職業的自立に向けた力をはぐくむ「キャリア教育」が注目を集めています。平成十一年の中央教育審議会答申にはじめて「キャリア教育」という言葉が登場。その後、平成十九年五月には政府全体の方針となる「キャリア教育推進プラン」がとりまとめられました。平成二十年の中央教育審議会答申には左記のような記述があります。

「将来子どもたちが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくためには、子どもたち一人一人の勤労観・職業観を育てるキャリア教育を充実させる必要がある」

「子どもたちの発達の段階に応じて、学校の教育活動全体を通して組織的・系統的なキャリア教育の充実に取り組み必要がある」

「学ぶことや働くこと、生きることを実感させ将来について考えさせる体験活動は重要であり、それが子どもたちの自らの将来について夢やあこがれをもつことにつながる」

「教える時に最も学ぶ」。キャリア教育に関わり企業人材が成長する

キャリア教育に関わった企業からは、社会貢献とは別のメリットも聞こえてきます。

「子どもたちの前で自分の仕事を語ることで、社員の働く意欲が高まった」

「会社見学をきっかけに、社内清掃への関心が高まった」

「地域での知名度が上がり、社員が以前よりも自社に誇りを持つようになった」

こうしたことから、キャリア教育に費やす時間や、時には資金を「社会貢献費」ではなく「人材教育費」として考える企業も増えているようです。また近年では「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」の重要性も説かれています。社員が地域や社会に関わるきっかけのひとつとなる、みる動きもあります。

学校・地域・産業界が参加し、互いに学びあうことができるキャリア教育。「教育への協力を依頼する」「依頼を受ける」という関わりではなく、「地域全体で教育を担う人々を支援していく」「地域全体でお互いに育ち合う」という意識改革が、すべての人に求められているのかもしれない。

キャリア教育コーディネーターが 全国で活躍しています。

平成21年度経済産業省「キャリア教育民間コーディネーター 育成・評価システム 開発事業」を行う全国9事業者と中核事業者



NPO法人スクール・アドバイス・ネットワークが全国9地域の
キャリア教育コーディネーター育成事業者のとりまとめを実施

理念

- 「キャリア教育コーディネーター」の理念
- ①子どもたちが能力を活用できる「場」を提供することで、地域一体となったキャリア教育の実現を促す。
 - ②教育に対する情熱と高い倫理観を有し、一定の知識・技能習得後も自ら学び成長しつづけていく努力を怠らず、我が国のキャリア教育の充実に努める。

機能

- 「キャリア教育コーディネーター」の基本機能
- ①地域資源の発掘とネットワークの構築・維持
 - ②学校や地域のニーズを踏まえたキャリア教育に関するプログラムの開発支援
 - ③プロジェクト運営管理、連絡・調整

知識・技能

- 「キャリア教育コーディネーター」が有すべき知識・技能
- ①キャリア教育概論の理解
 - ②キャリア教育コーディネーターの業務と在り方の理解
 - ③学校と企業などのネットワーク構築の方法
 - ④産業・地域の現状の理解
 - ⑤学校の現状と課題の理解
 - ⑥キャリア教育に関するプログラムの開発方法
 - ⑦プロジェクトの管理運営に必要な知識・手法

戸惑いを感じる学校と
企業の間をつなぐ
架け橋の人材

キャリア教育が求められているのにも関わらず、地域や学校によって取り組みに差がある理由のひとつに教師の多忙さがあります。

業務が多忙だけでなく、近年ではさまざまな保護者への対応や、発達・学習障害児への特別支援など、問題も複雑化しています。またキャリア教育の実施には、授業内容の立案だけでなく、外部講師への依頼などさまざまな調整事項があり、通常の教科に比べて準備に時間がかかります。また、こうした業務はこれまでの教員に求められてきたスキルとは異なります。地域や企業に協力してほしいけれども、何をしたいのかわからない。戸惑う学校現場の姿が透けて見えます。

一方で、企業も教育にどう関わればいいのかからずにはいません。教育支援活動を行わない理由として、教育参加への意志の有無よりも「学校側からの企業への支援要望がない」と言っている企業は多いのです。

経済産業省では「児童生徒の能力を発揮する場を提供することで、社会的・職業的自立に向けた力のはぐくみを支援するキャリア教育の実現を促す教育支援人材」と定義しています。

具体的には、地域や企業・学校や教育行政とネットワークを作り、学校や地域のニーズを踏まえた教育プログラムの開発や現場での実践支援を行います。キャリア教育をひとつのプロジェクトとした場合、プロジェクトリーダーとして責任を持って遂行していく人材なのです。

しかしながら、現在は圧倒的に人数が足りない状況です。全国に小・中・高校は約三万九千校ありますが、実際にキャリア教育をコーディネートしている人材は各都道府県に数人程度、職業として活動するコーディネーター一人が受け持てる学校数は、約十校程度と考えられています。すると、完全に稼働している人材だけでも四千人近くが必要。中にはボランティアやパートとして限定的な働き方をする人がいると想定すると、もっと多くの人材が必要となります。

経済産業省では、こうした人材の育成こそが、キャリア教育の振興につながるかと考え、平成二十年度からキャリア教育コーディネーターの育成ノウハウの開発と評価を行う「キャリア教育民間コーディネーター育成評価システム開発事業」を行い、全国9地域で実証しています。

つまり、支援してほしい学校と、支援したい企業がお互いに手を結ばずにいるのが現実です。

そこで必要となるのが、学校と企業との架け橋となる「キャリア教育コーディネーター」と呼ばれる存在です。効果的なキャリア教育の実現をめざし、教育界・産業界双方の事情や文化を理解しながら仲介役として活躍します。

経済産業省では、平成十七年度から二十年度まで、全国二十八地域でキャリア教育コーディネーターの支援を行う「地域自律・民間活用型キャリア教育事業」を行ってきました。この時のアンケート結果を振り返ってみると、キャリア教育を実施した学校の94.1%、行政94.9%、産業界78.6%が「効果的なキャリア教育の実現にはコーディネーターが必要」と回答しています。

教えるのではなく、「能力を活用する場」を提供する仕事

では、具体的に「キャリア教育コーディネーター」とはどんな仕事をする人材なのでしょう。

必要な知識と技能を習得した人材を育成。

一年目は手探りの中、各地域でコーディネーター育成を開始。「現場で役立つコーディネーター」であるために、座学だけでなく実際のキャリア教育の実践場面などにも受講生を参加させたり、企業に出向かせたりと、現場感を大切にしてきました。

二年目となる平成二十一年度は、各地域独自のプログラム開発・実証をとりまとめ、各地域のコーディネーター育成ノウハウを結集した「キャリア教育コーディネーター育成のためのガイドライン」を作成。今後はこのガイドラインに沿って専門的な知識や技能を持ったキャリア教育コーディネーターを全国で育成し、多くの人材がキャリア教育の現場を支援していける体制作りを行います。

そして、最終的にはキャリア教育のコーディネーターを行っている団体やコーディネーターの育成団体による全国的なプラットフォーム組織を立ち上げ、その団体のもとで、全国的な展開を目指します。

学校にとっては豊かなキャリア教育を実践するために頼りになる存在であり、企業や地域にとっては独自の教育プログラムの開発や教育への関わり方などが相談できる存在。子どもたちに対して実社会とつながった学びの「場」を提供するキャリア教育コーディネーターの活躍に御期待ください。



戸惑った。不安だった。嬉しかった。

初めて 教育現場に

参加した 私たち。

だったので、よかったです。

司会●特に京都駅での受け入れについては準備は大変でしたよね。

平川●百八人に半日何をしてもらうか。お客様と接する改札・出札業務は難しいだろうと判断しました。そこでグループ会社にも協力をあおぎ、鉄道案内所の案内や、忘れ物センター、車両内や駅構内の清掃、訓練室での切符の発券体験、駅での安全やマナーの講座や、若手社員との懇談会まで計画しました。最終的にはグループ会社も含め三十人近くの社員で迎ええました。小学校二年生なら、



堀下 智子さん
西日本旅客鉄道株式会社
安全研究所 ヒューマンファクター研究室
研究員

安全研究所で、「効果的な上司部下間でのコミュニケーション」をテーマとして研究を行う。高度な探究活動が評判の高校での講演で、気構えたという。

司会●今回、みなさんには中学・高校で講座や、職場体験を受け入れていただきました。それでは教育に関わることになった最初の感想や、準備で戸惑われたことなどからお聞きしたいと思います。

平川●京都駅は一日平均三十六万人のお客様が乗降しています。これまでは、駅が混乱することを恐れて、職場体験や駅見学を受け入れていませんでしたが、今年度からは社会貢献活動の一環として積極的に受け入れることにしました。今回のお話をいただく前にも、小学校二年生百人の駅見学を実施しておりました。そんな時にタイミング良くコーディネーターの方からのお話があったんです。何とかいけるだろう、と思っていたんですが、実際には小学生の見学と中学生の職場体験とはちよっと違いましたね(笑)

飯田●社会人向けの講演はよく行っていますが、中学生向けの講座は初めてです。新入社員に教えたことの延長線の話だけでなく、中学生に聞かせたいテーマについて若手も含めて事前に議論を交わしました。「働きがい・誇り」「チームワーク」「なぜ理系の勉強

今回は、初めて中学校・高校で講座を行ったたり、職場体験を受け入れた方々に集まっていたいただきました。戸惑いや事前準備、現場での楽しさを語ってもらいました。



小泉 義克さん
西日本旅客鉄道株式会社
鉄道本部 電気部 企画課

電気設備の現場支援、企画を行う。今回は中学の理科・電気の単元と関連づけての授業を計画。専門用語や技術をどこまで説明するか戸惑いながら準備。

をするのか」など良い意見が出てきて。特に見えないところでもいろいろな業務の人たちが協力しあっていることを強調して入れることにしました。これが中学生に「番伝えたいことでした。」

堀下●私も初めて高校で講座をさせていただきました。鉄道の話、心理学の話...何を話そうか考えたあげく普段の研究内容をお見せしようということになったんです。代表的なテーマを2つ選び、詳しく説明しました。ただ高校で勉強していること、安全とか心理学は直接は結びつかないので不安もありました。結局私たちのような文系・理系とわけられない仕事があることも伝えることにしようと思いましたが、



平川 英彦さん
西日本旅客鉄道株式会社
京都駅 営業総括助役

京都駅で営業総括助役として、宣伝・顧客対応などを含めた営業部門の管理を行う。今回は京都駅職場体験受け入れ責任者として関わることに。

回中にポケットに手を突っ込んでる生徒に注意しようかどうか悩んだあげく思い切って注意したり、熱心な生徒の質問に答えたり。いい経験でしたが、やっぱり疲れましたね(笑)。

飯田●私の場合は、いい意味で見た目と行動が一致していないな、と感じました。一番やんちゃそうだった子が一番積極的に発言していた記憶があります。けれども最後には答えに窮するユニークな質問がたくさんありましたね。「電車が二車両いくらくらいなのか」「社長はいくら給料をもらっているのか」。そんな質問答えられません(笑)。

堀下●先生の前でリハールをした時にいろいろとコメントをいただいたので、気を楽にして講座をすることができました。高校生と対話してみると彼らはかわいいんです。「JRって何の略?」「うちの近所の踏切がずっと上がないのは何?」。事前に優秀な高校だと聞いて気構えすぎたのを

反省しています。

小泉●飯田さんたちから事前情報を聞いていたので、電車の値段や電気の使用料も調べておいたんですが(笑)。自分の中学時代を思い出した上司に「窓ガラスが割られるぞ」「暴れるぞ」「席立つぞ」と脅かされていましたが、実際に行った中学は静かに聞いてました。反省としては、もっと実際の物を見せて説明すると良かったかな。

司会●今後の関わりはどう考えていらっしゃるでしょうか。

平川●職場体験はJR西日本に



飯田 昌幸さん
西日本旅客鉄道株式会社
安全研究所 ヒューマンファクター研究室
副室長

安全研究所で人間の特性(ヒューマンファクター)についての研究・総括などを行う。講演経験は多いが、今回は初めての中学生の前での講演となった。

対する理解を深めていただくための大切な取り組み。将来のファン作りにも繋がります。度にたくさんの人を受け入れるのは難しいですが、少人数で内容の濃い関わりができれば、と思っています。

飯田●ご存知の通り、福知山線の事故を受けて、社内での安全性向上に向けての取り組みを必死でやっているところです。こうした社会貢献は、仕事への意欲や誇りにもつながりますから、今後もぜひ関わらせていただきたいと思います。また広報やCSR部署に任せるだけでなく、各部署で動かしていくことも大切ですね。



もう始まっています

コーディネーター 事例紹介 29

掲載企業一覧(順不同)

- 株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント
- 子ども農山漁村交流プロジェクト推進協議会
- パナソニック株式会社
- 株式会社キッズステーション
- 小樽職人の会・小樽観光協会・石原裕次郎記念館等観光施設9社
- 株式会社日立製作所
- 株式会社ユニクロ
- アイシン精機株式会社
- 西日本旅客鉄道株式会社
- 株式会社西島製作所
- 株式会社読売新聞東京本社
- 積水化学工業株式会社
- 焙茶工房しゃおしゃん 滝沢村商工会
- アメリカン・エクスプレス・インターナショナル, Inc.
- アデコ株式会社
- 本州四国連絡高速道路株式会社
- 日産自動車株式会社
- 株式会社トヨタUグループ
- 株式会社 豊田自動織機
- 大和ハウス工業株式会社
- 日本ハム株式会社
- 積水ハウス株式会社
- 有限会社ワッツビジョン
- グンジ株式会社
- 近畿日本ツーリスト株式会社
- 株式会社デザート
- 株式会社伊予銀行(地域協力企業代表)
- 株式会社エアー沖縄
- 沖縄ワタベウェディング株式会社

全国各地で学校と企業が力をあわせた授業がおこなわれています。
これまでにコーディネーターがマッチングを行い実現した、
学校と企業のコーディネート事例をご紹介します。



学校関係者の皆様へ：企業とマッチングをご希望される方は、担当コーディネーターまでご連絡ください



授業名	キャリア教育支援プログラム-ゲームでつながる授業と仕事-
企業名	株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント http://www.scei.co.jp/csr/education.html
コーディネート団体	NPO法人企業教育研究会

- 実施地域：全国
- 実施学年：小、中、高等学校
- 授業数：1時間～2時間
- 必要な設備：PC、プロジェクター、スクリーン、スピーカー、筆記用具(無い場合はNPOでご用意いたします。)



1本のゲームソフトをに携わるさまざまな役割の人や、人気ゲームのプログラマー、アジア地域を業務範囲として現地の人たちと協力しながら働いている人など、企業内で働いているさまざまな分野の人物を取材。その話をもとに、授業内で使用する映像などの教材を作成する。

総合的な学習の時間などで行う調べ学習の発表を、ゲームを制作して発表するなど、ゲーム産業の仕事にとりいれた授業や教材の題材は尽きない。子どもたちの関心が高いゲームコンテンツ産業の強みを最大限に活かした授業を、今後も全国の学校で展開していく。

のゲーム事情を取材した映像を通して国際理解を深める「世界に広がる日本のゲーム産業」といった多様な授業を出張授業で行っている。

さらに、ゲームの海賊版やインターネット上での公開といった著作権上の問題を扱った「ゲームで学ぶ著作権」に加え、ゲームキャラクターの性質を活かして分数やつるかめ算を楽しく学習する教材も作成。その部はACEのホームページで公開している。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

石川 清香
 仕事紹介だけでは、子どもたちにとって「学校生活とは関係のない世界」と思われがちです。そこで、私たちは、学校での学習内容と仕事との関連付けた授業を行っています。

TEL043-308-7229
 (NPO法人企業教育研究会)
 HP <http://ace-npo.org/info/scei/>
 info@ace-npo.org

授業をおこなった企業の感想

実施校の先生方からは「わかりやすだけでなく、普段の学習の意義についても考えてもらうことができた」「子どもたちの活気が普段とは全然違うものだった」といった感想を多数いただいています。ゲームは現代の子どもたちにとって極めて身近にあり、強い興味・関心を持ちやすい存在であるため、高い学習効果が期待できます。実際、授業を行うたび、集中して話を聞いている子どもたちの様子を見て感心しています。

授業を受けた子どもの声

- 私たちが学校でしていることは今後とても役に立つということが分かったし、ゲーム一つにもたくさんの人の知恵や苦労が詰まっているということも知りました。(小学6年生)
- “数学なんていらない”って思っていたけど、私たちに関係のあるところで使われていると知って、とても驚いた。(中学3年生)

キャリア教育、関数、物理 付き合い方…身近なゲームを題材に多様なプログラムを展開

家庭用ゲーム機や多彩なゲームソフトを作っている株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント(以下、SCE)は、小学生・中学生・高校生を対象にした授業プログラムを開発・実践している。テレビゲームコンテンツ産業について認識を持ってもらうとともに、青少年の健全育成に貢献したいという想いから、2006年度より全国の学校に無料出張授業を行っている。

授業は、千葉大学教育学部の授業実践開発を行う研究室を活動母体とする、NPO法人企業教育研究会(以下、ACE)と協働。ゲーム制作の仕事や制作者の考えを学んで、メディアとの付き合い方を考える「ゲームとの付き合い方を考えよう」と題したメディアリテラシーの授業プログラムを皮切りに、ゲームやそれに関連する仕事を題材にした新しい授業を次々と開発。2009年度までに9種類の授業プログラム教材がそろっている。

1本のゲームソフトを開発・販売する間に関わった、プログラマー・営業・お客様相談などのさまざまな仕事を担当する人が登場する「ゲーム会社で働く人たちは」、特にキャリア教育の授業として小学校から高校まで幅広く実践されているプログラムだ。授業はACEのスタッフとSCEの社員の掛け合いで進行。子どもたちになじみのあるゲームソフトに関わるそれぞれの担当者に行ったインタビュー映像をクイズ形式で紹介していく。さまざまな力をもった多くの人が協力しながら働いていることを、1時間で楽しく学習する内容となっている。

「ゲーム制作と数学の意外な関係」は、中学生が数学の学習でつまづきやすい単元の一つである関数の授業プログラム。ゲームに出てくるキャラクターを動かすためのプログラミングの中に関数の数式が使われていることを解説。実際に関数の式を入力すると、そのグラフ上をキャラクターが動くプログラムを使って体験することが可能。今度は自分が動かしたいように関数の数式を考える問題を出題。楽しみながら関数を学習することができるのも、テレビゲームを題材にした授業ならではの。最後に、プログラマーへのインタビュー映像で仕事と数学の学習とのつながりや、メッセージを紹介。「なぜ数学を勉強するのか」という問いに対する一つの答えを実感できる1時間となっている。

他にも、ゲームの中で物体が飛んだり跳ねたりする動きに、物理の計算が使われている様子や「ゲーム制作と理科の意外な関係」や、香港で開催されたアジアゲームショウで働く日本人スタッフの仕事や現地



授業名	子ども農山漁村交流プロジェクト
企業名	子ども農山漁村交流プロジェクト推進協議会
コーディネート団体	子どもの未来創造協会

- 実施地域：関東、東海、北陸、近畿、中国、四国
- 実施学年：小学校5、6年生
- 授業数：60時間～
- 必要な設備：特になし



の教員や保護者からは、「体験活動を通して、子どもたちが確かに変わった！」という声が多く寄せられた。体験中の成長だけでなく、その後の生活や学習にも大きな影響を与えたという報告も少なくない。子どもたちにとっては、「楽しい思い出」にもなり、学校行事のひとつとしても有意義なものであると言えよう。

最後に、体験学習の成果を報告し合う「事後学習」。体験をまとめ、自分が感じたことを、人に伝える。ことで、より深いのある学習となる。JA職員による体験後のまとめや、新たな取り組みのサポートなど、子どもたちの成長に合わせた継続的な取り組みができるのも大きな特徴だ。

「ふるさと生活体験」は、さまざまな面で子どもたちの成長を促す効果が期待できる。例えば、豊かな自然の中での体験は好奇心や学ぶ意欲を十分に刺激するだろう。親元を離れて仲間との共同生活を経験することで、自立心や思いやりの心が育まれる。また、生産・収穫活動から食べ物の大切さを再認識し、好き嫌いの軽減につながることもある。さらに、教師や親以外の幅広い世代とのふれあいが子どもたちのコミュニケーション能力を高め、社会規範や生活技術の習得に役立つ。子ども自身はもちろん、教員にとっても保護者にとっても、たくましい成長“の手こたえを感じるものになるはず。

自然豊かな農山漁村での「ふるさと生活体験」が子どもたちの「生きる力」を育むきっかけに

国語も理科も社会も……、本来教室で学ぶことはすべて、生活に密着していること。生きていくための力となること。ところが今、子どもたちがそんな実感を得られる機会が減っているのが事実。また現代の子どもたちにおいて、「人間関係をうまく作れない」「集団生活に適応できない」「規範意識の低下」といった多くの問題が指摘され、その要因として自然や地域社会と関わる機会の減少や、集団活動の不足などが挙げられている。

未来を担う子どもたちが、変動する社会で生きていくために必要な能力を身につけられるようサポートする。これが、現代の学校教育および社会全体に求められている課題だ。

そんななか、平成20年度から、総務省・文部科学省・農林水産省の連携による「子ども農山漁村交流プロジェクト」（愛称…ふるさと子ども夢学校）がスタート。これは小学生を対象に、農山漁村での長期（3泊4日間程度）宿泊体験活動を推進するもの。豊かな自然や農林漁業に触れることで、「生きる力」を育むきっかけを作り、子どもたちのたくましい成長を支えようという試みだ。

プロジェクトの特徴は、農林漁家での宿泊体験や作業体験を行う「ふるさと生活体験」。子どもたちは少人数で農林漁家の家庭に宿泊し、

>>> 担当コーディネーターからのひと言

小寺 良介
 学んで体感して知識が知恵になる。そんな学びが得られ時間です。親もとから離れて過ごす民泊体験も得たい経験でありほとんどの児童が日常へ感謝します。

TEL03-5795-0510
 (子どもの未来創造協会)
 HP <http://www.kodomo-mirai.org/>
 koder@kodomo-mirai.org

授業をしたいならこちら

— 授業をおこなった企業の感想

- 子どもたちは豊かな自然の中での様々な体験を通して、自然への興味・関心を深め、物事を積極的に探求する態度が培われたようでした。
- 農山漁村の生活や伝承される文化、産業などに直接ふれる機会を持つことで、興味や関心、学習意欲が向上する姿が見られました。
- 農業の大切さを知って食に対する意識が変わり、食べ物を大切にしたり嫌いなものでも食べられるようになったことで、プロジェクトの意義を感じました。

— 授業を受けた子どもの声

- 一度も食べなかったトマトを、もぎたてを食べたらとても甘くておいしかった。
- 稲刈りでは、干すために束にするのが難しかったけど楽しかった。
- 他の人がいいことをしていることが目に入ると、自分も頑張ろうと思った。

各農林漁家の方々が、児童の“お父さん”“お母さん”として我が子のように接してくれる。農林漁家ならではの生活文化や食に触れ、交流を深めることで、宿泊体験先が“第2のふるさと”に。

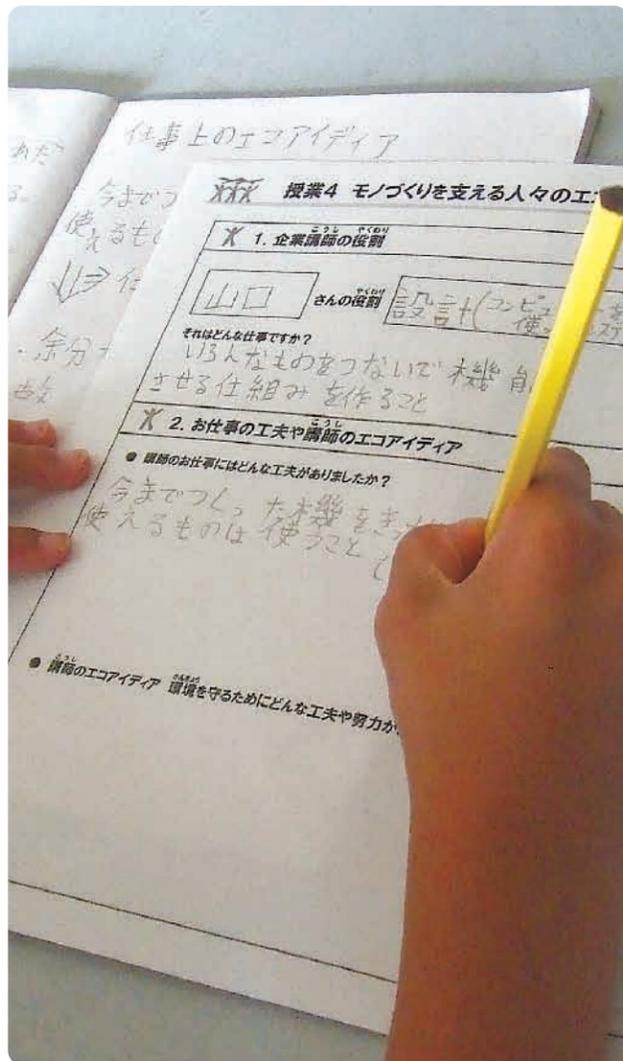
「ふるさと」のような雰囲気の中で、農林漁家の方々との交流しながら、さまざまな体験活動を行っていく。受け入れ地域は北海道から沖縄まで全国約90地域に広がっており、田植えや稲刈り、野菜の収穫、海や川での魚採りなどそれぞれの土地ならではの活動に取り組みることができる。

プロジェクトの流れは、大きく分けて3段階。まずは宿泊体験へ出発する前の「事前学習」。受け入れ地域のJA職員を小学校へ派遣し、授業を行う。稲作体験に挑戦したある小学校では、「田んぼのメカニズム」や白いお米が自分の口に入るまでの道のりを事前に学び、子どもたちは稲作への興味・関心を膨らませた。

次に、いよいよ「体験学習」。野外炊飯や農作業、昆虫採集やネイチャーゲームなど、発見や驚きの連続を味わう。すでに実践した小学校



学校から送られてきた講師への御礼のお手紙と学級通信。裏には、子どもたちが考えた自分のエコ宣言が掲載されていた。



授業名	モノづくりのエコアイデア
企業名	パナソニック株式会社
コーディネート団体	株式会社キャリアリンク(大阪府)

- 実施地域：関西・関東(東京都、神奈川県)、中部(愛知県)、九州(福岡県)
- 実施学年：小学校5年生、中学校
- 授業数：全5時間(中学校は4時間)
- 必要な設備：パソコン、プロジェクター、スクリーン



工業生産を支える人たちの役割を通じて考える 5年生社会科「モノづくりのエコアイデア」

社会科 + 環境教育 + キャリア教育

「育成と共生」を理念に「次世代育成支援「環境」のふたつの重点分野で企業市民活動に取り組みパナソニック株式会社。「次世代育成支援分野」の取り組みの一環として、教育貢献をひとつの重要な課題と位置づけ、独自の取り組みを始めている。

同社が実施する「モノづくりのエコアイデア」の特徴は、社会科、環境教育、キャリア教育の要素が詰まっていること。小学校5年生の社会科単元である「工業生産を支える人たち」と連動しているだけでなく、環境教育的要素も持つ。また、モノづくりに携わる人々の努力や工夫から仕事の役割を考える、というキャリア教育の要素も持っている。進め方の特徴としては児童の考える力を育成する「思考支援型プログラム」であり、ワークシートなどの題材をもとに児童が自分で考えていく構成になっている。

授業は5時間。そのうち4時間は、ワークシートやDVDなどの教材を使い先生に実施していただく構成。カラフルなワークシートは、楽しく論理的に考えさせることをめざして作成されている。時代の流れに伴い家電によって便利になる生活がイラストでわかったり、洗濯機の進化が実物写真で

紹介されていたり、と見ているだけでも楽しくなる。この教材を使った授業案が書かれたティーチャーズガイドとセットになっている。

プログラムの最初の3時間は先生に行っていた授業。教材を使い「家電製品と私たちの生活との関わり」「家電製品の進化と私たちの生活」「工業生産を支える人々の役割と工夫」の授業を進めていただく。4時限目に同社の社員が登場。ものづくりのさまざまな役割の中から、ある職種の社員が登場し、仕事上での環境のための工夫や努力、また自分の仕事に対する思いなどを語る。

そして最後の授業は、今までの学習内容を参考に、家電製品を使う立場として、自分ができる環境行動について子どもたちに考えさせる。

社員出張が無理な地域はビデオ教材で。22年は300校目標

教壇に登場する社員は、事前研修としてコーディネーターから数時間のレクチャーを受けている。自分で資料を作成し、それをつかった模擬授業や、先輩同行研修などを経た上で、実際の教壇に立つ。内容が吟味されているだけでなく、話し方や言葉の選び方も安心して聴いていられると、先生方からも感心される

ことも多いという。他にもこんな声が届いている。「行き届いたワークシート、ティーチャーズガイドのおかげで、授業がしやすかった」「エコアイデアについて家庭でも話す機会ができたようで『親子で意識をもちながらエコに参加できる』と保護者からも好評でした」

「環境学習を意識しながら授業を進めたつもりであったが、社会科での産業、特に企業が商品開発に関わることも興味を持ち、ねらい以上の成果を得ることができた」「モノづくりにも企画や設計などさまざまな役割が関わっていることが児童にとっても新たな発見だった」。

このプログラムを21年度には90校で行ったが、22年度は300校での実施をしたいと考えている。社員が出張できない地域は社員の登場部分をビデオで対応するなど、できるだけ全国たくさんの方の学校でこのプログラムが実施されることを希望している。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

上田 佳代子
このプログラムは、社会科の単元と連動している上、キャリア教育、環境教育の要素を持ち、複合的な学習ができるところがポイントです。いろいろな学校から満足の声が聞けてうれしく感じています。

TEL06-6251-6001
(株式会社キャリアリンク)
HP <http://www.lab-warp.ne.jp/>
✉ jugyo@lab-warp.ne.jp

授業をしたいなら
こちら

■ 授業をおこなった企業の感想

出前授業で学校を訪問するたびに、私たちモノづくりの現場の人間の話を聞いている子どもたちの「生き生きとした眼差し」に驚かされ、その度に教育貢献活動の意義を感じています。私たちはこれからも地球の未来を担う子どもたちを育てることに全力を挙げて取り組んでいきたいと考えています。

■ 授業を受けた子どもの声

- 工業生産に関わる、すべての役割の人たちが協力しないとよい製品ができませんんだなと思った。
- 家電製品には歴史があって、現代のものは昔のものをもとに便利にしていたということが分かった。
- 会社でもたくさんエコ活動をしているから、私たちもエコ活動をしようと思いました。



授業名	マギー審司のSmile Magic
企業名	株式会社キッズステーション http://www.kids-station.com/
コーディネート団体	きてきて先生プロジェクト

- 実施地域：関東地方を中心に全国
- 実施学年：小学校4～6年生
- 授業数：2時間
- 必要な設備：机、椅子



キッズステーションが制作する「マギー審司のSmile Magic」の放映時間は、毎週月曜～金曜18:27～18:30、毎週土曜18:57～19:00、毎週日曜15:57～16:00

足りていくと手の動きがぎこちなくなり、失敗する。練習のときは簡単でも本番のようにやってみるとうまくいかないということを感じ取るのも大切だ。担任の先生もマギー審司さんの指示を聞き、学級の状況をみながら子どもたちに練習をさせる。

番組のプロデューサーである株式会社キッズステーションメディア事業部の米山洋夫さんは、「財政破綻した夕張市や、複式学級の小さな小学校、統合する直前の島の学校も訪問した。学校全体で歓迎してくれたり、近所の方が畑で採れたものを差し入れに持ってきてくれたり、地域の人との触れ合いも多い」と語る。授業の様子は、テレビラジオ局、新聞などの取材や、地元の方が学校に見学に来たこともあり、ささやかながら地域の活性化に「役買っている」ともいえる。

子ども向けテレビ局のよさを生かして

テレビ局が学校へ行って取材を行うことは珍しくないが、この番組は現場の教員とともに、学校の正規の授業を行うのが最大の特徴。番組として全国に活動を紹介できるテレビ局のよさを生かし、保護者が普段あまり見ることのない学校での子ども元気な姿を、子どもの好きなマジックとともに視聴者に届ける。見る人にとっても楽しい番組をつくり、子ども向けテレビ局としての社会貢献につなげたいと、株式会社キッズステーションが3年前から取り組んでいる活動である。

内容は、手品師であるタレントのマギー審司さんが学校へ行き、子どもたちと出会って授業を行うというもの。1時間目は出会いを中心に、その子どもが取り組むべき課題(手品)を見せて、ポイントを説明。子どもたちは練習をして、次の時間に他の学年や、先生、町の人などに、手品を披露する。その後、質問や感想を話しあい、交流などがあつて授業終了というのびのびとしたパターンだ。手品が上手くできて拍手喝采に大喜びということもあれば、失敗して落ち込むこともある。プロ顔負けの真剣な様子で取り組む子どもたちの豊かな表情も番組の魅力のひとつである。

番組は学校の授業であることを考慮し、完全なパッケージ化はしていない。学校側の要望に沿って、例えば

5年生の情報授業であれば、制作会社のスタッフを中心にテレビ局の仕事や機材について話をしたり、機材にふれたりすることも可能だ。また、キャリア教育が中心であれば、制作会社の仕事に加えて、「マギー審司さんがなぜ手品師をめざしたのか?」など、キャリアに関する話を、子どもからの質問などを交えながら行うこともできる。あくまでも学級や学校、教科単元のねらい、ねがいを中心にすえ、授業を組み立てていくのが従来のテレビ局の撮影や取材とは大きく異なる点である。

大切なのは表現力とコミュニケーション力

「おしゃべりマジック」といわれるマギー審司さんの手品は、巧みな技術だけでなく、軽妙な語り口によって子どもの心をしっかりとらえてしまう。その様子は、現場の教員も「勉強になる」と舌をまくほどだ。「見簡単手品の課題は、器用な子どもであればすぐにクリアできる。しかし、大切なのはここから。いかに人をおどろかせ、楽しませるか。表現力や見せる相手とのコミュニケーション力が必要となってくるのだ。」

「自分も自信満々の初舞台で大失敗し、『言葉』で表現する力が必要だと痛感した」というマギー審司さん。授業では、「言葉の整理をしっかりと」という説明が頻繁に出てくる。手品自体は簡単にできても、そこに言葉

授業をおこなった企業の感想

こういった活動を続けていると、今の学校には昔とは異なる大変さがあると非常に感じます。とはいえ、子どもたちにとって、多様な体験を通じて多くの価値観と出会うことはとても大切。また、この番組をきっかけに地域や家族間のコミュニケーションが増えたという話を聞くと、本当にうれしく思います。この活動に限らず、テレビというメディアの特性を生かし、これからも子どもたちの未来へとつながるコンテンツを作りつづけていきたいと考えています。

授業を受けた子どもの声

- 重いカメラを運んだり、位置も工夫されていて、リハーサルまでやっているからすごいと思いました。(小学6年生)
- ぼくは手品のことにすごく興味をもちました。ぼくも人を喜ばせるのが好きなので『楽しかった』ことよりもマギーさんにあこがれました。(小学6年生)

>>> 担当コーディネーターからのひと言

香月 よう子
授業の目的やねらいがはっきりしている方がよい表情が撮れます。番組になるので、きらきらと輝く子どもたちが残せるよう、学校としっかり打ち合わせしたいと思います。

TEL050-3424-8166
(きてきて先生プロジェクト)
HP <http://www.kitesen.org/>
info@kitesen.org

授業を
したいなら
こちら



授業名	小樽を売り込め! 小樽PRプロジェクト3
企業名	小樽職人の会・小樽観光協会・石原裕次郎記念館等観光施設9社 [石原裕次郎記念館] http://www.yujiro-kinenkan.com/ [小樽水族館] http://www.otaru-aq.jp/ [小樽観光協会] http://www.yujiro-kinenkan.com/
コーディネート団体	NPO法人北海道職人義塾大学校

- 実施地域：北海道小樽市
- 実施学年：中学校3年生
- 授業数：授業30時間
放課後7時間～21時間
- 必要な設備：特になし



作のグッズ製作を担当するグループも例年以上に製作は授業時間を超えて放課後に及び、完成するために毎日、職人さんの工房に通うグループもあった。こうして6月初旬の修学旅行直前まで作業は続き、500個の福来樽夢袋は完成した。

配布先においては福来樽夢袋を配布するだけではない。盛岡市の商店街で生徒が企画したイベントを行うことにより、たくさん市民を集めた上で最後に福来樽夢袋を渡さなければ小樽をPRしたことにならないため、イベントで見せる踊りやアトラクションの練習にも余念がない。修学旅行の自由時間さえも練習に費やした。このイベントは盛岡市でも話題となり、地域のマスコミの取材が入ること、生徒たちのモチベーションも自然と上がっていく。

修学旅行に至るまでのこの授業において、生徒たちは校外に出て職人さんや事業所の担当者、盛岡市の市民など多くの大人と交わる中で、コミュニケーション能力を養い、自ら前に一歩踏み出し、大人たちが納得できる企画を考え抜き、グループで働くことで社会人基礎力を総合的に高めることができる。例年、修学旅行から帰ってきた生徒は、お土産の南部せんべいを持って、協力してもらった職人さんの工房を訪れる。4月に会ったときより、ひと回り大きくなった彼らを見て協力して良かったという職人さんや事業所も多い。

小樽を売り込め! 中学生による 小樽PRプロジェクト3 小樽夢袋をつくらう!

修学旅行の際に盛岡市で、小樽の観光PRを行うことを目的として始めたプロジェクトも今年で3年目を迎えた。今年度のコーディネーターは昨年までの課題を克服して新たな方向性を模索することが求められた。昨年までの課題の一つに、生徒たちがマスコミや先輩たちから、この授業の進め方について事前に情報を得ることで、自分たちが創造すべき小樽グッズのアイデアが硬直化していたこと。もう一つが、授業に協力してもらえない事業所のほとんどが職人の工房だったためバリエーションに欠けることであつた。また、生徒たちは製品を包装せずに、そのまま盛岡の市民に手渡していることにも違和感があつた。

そこで今回はもっと多くの事業所を巻き込んで、過去2年とは別の視点でPRグッズを作ろうということになり、コーディネーターは先生たちと協議を重ね、今年度はおたる福袋の企画製作を生徒が実施。袋の中に入れる小樽PRグッズも生徒が製作し、多くの事業所から協賛グッズを集めることとした。福袋であるから、今までのように製品を包装することなく手渡しすることはないのだが、袋の中身はグッズが一つというわけにはいかない。生徒たちは袋のデザインから始

まって、袋の中身を作るためグッズの企画も例年通りに職人さんの工房に何日も通って製造してもらうことに。加えて、多くの観光施設に生徒が出向き事業所にプロジェクトの目的を伝え、協賛グッズを集めることは例年以上にハードルが高いものである。

ということで製作スケジュールも前倒して進級して間もない4月下旬から取りかかり、最初にガイダンスで今後の授業の進め方と協力してもらった職人さんたちを紹介。以後、福袋のネーミングとデザインを担当する者、PRグッズの企画製作を行う者、観光施設から協賛グッズを集める者にグループを分け、それぞれが活動を始めた。翌週にはグループ毎に立てた企画をコーディネーターと職人さんがチェックして予算や工程を検討して実現性の可否を判断させてもらい、多くの企画を差し戻すことになったが、昨年よりは生徒のアイデアに独創性も見受けられた。再度、再々度と企画のチェックを行い、ようやく福袋(福来樽夢袋と名付けた)の製作は動き出すこととなった。

生徒が道外で小樽PRをするという企画には小樽市内の多くの事業所の共感を呼び、観光施設に協賛グッズが数多く集まった。特に小樽を代表する観光施設である石原裕次郎記念館からは、ふたを開けると石原裕次郎のヒット曲が流れる高価なオルゴールの提供を受けるなど福袋の中身が充実する一方、それに見合う自

>>> 担当コーディネーターからのひと言

藤田 和久
コーディネーターも学校も成功例や前例を踏襲してしまいがちだが、このプロジェクト型の授業では、大きく授業の中身や目的を変えず、かつ生徒に先を読ませない、企画力がコーディネート腕の見せ所となる。

授業をしたいなら
TEL0134-23-7205
(NPO法人北海道職人義塾大学校)
HP <http://www.hk-crf.jp/>
✉ shokunin@24.am

授業をおこなった企業の感想

子供たちがものを作り、小樽をPRしようとする姿勢に感動した。裕次郎さんのことも伝えて欲しいと思った。

授業を受けた子どもの声

●僕らの作った作品とともに観光施設の商品も受け取ってもらえ、それをきっかけに小樽の観光施設のPRもできた。



授業名	ユニバーサルデザイン出前授業
企業名	株式会社日立製作所 http://www.hitachi.co.jp/Int/skk/jirei/domestic/universaldesign/
コーディネーター団体	特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク

- 実施地域：首都圏
- 実施学年：小学生(中学年～高学年)
- 授業数：2時限(90分間)
- 必要な設備：もぞう紙、カラーマジック



クイズなども交えながら、楽しく、わかりやすくユニバーサルデザインの考え方を紹介。「視覚障がい体験」では、ボランティアの表情も真剣そのものだ。

し方を心がけるようになってくる。授業の後にホッチキスを持ってきて「これもユニバーサルデザインかな」と聞きたる子どもたちの姿もあり、授業をきっかけに世の中をユニバーサルデザインの切り口から見て考える習慣づくりにつながっているようだ。

授業を担当するのは事前研修を受けた従業員ボランティア。回数を重ねるごとに伝え方や課題に工夫をこらし、より楽しくわかりやすい授業へと磨きをかけている。黄色いジャンパーをまとった従業員ボランティアの姿にははじめはぎこちなかった子どもたちも、授業終了後にはすっかりうちとけて、活発な質問が出るようになる。仕事も担当業務もさまざまな「働く大人」とのふれあいもまた、子どもたちにとって大きな収穫のひとつといえる。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

井上 尚子

この授業を通じて、「誰もが暮らしやすい環境のために自分たちができることは何か」を、子どもたち自身がそれぞれの豊かな発想力で考えるようになりました。

授業をしたいなら
TEL03-5347-2372
(特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク)
HP <http://www.sanet.jp/>
info@sanet.jp

■ 授業をおこなった企業の感想

- ユニバーサルデザインの概念を通じて子どもたちによりよい社会のあり方を考えてもらう授業ですが、それと同時に、社会のために自分はいったい何ができるのかを強く意識して行動するようになりました。
- 子どもたちの素直な感性に出会うたびに、新鮮な驚きと喜びを感じます。授業を通じて、自分自身も多くのことを学ばせてもらっています。
- 活動に参加してから、日立グループで働くことに誇りを持つようになりました。

■ 授業を受けた子どもの声

- 身近なものをちょっと工夫するだけで多くの人が便利になる。ユニバーサルデザインの考え方を通して、いろんな人の立場で考えることの大切さがわかりました。(小学6年生)
- 世の中には困っている人がたくさんいると思いました。困っている人がいたら、声をかけてお手伝いをしようと思います。(小学4年生)

おもいやりをカタチにしてみよう！

「ユニバーサルデザイン(UD)」とは、年齢・性別・身体状態などにかかわらず、誰もが使いやすい製品やサービスを考えているという概念。身近な家電から情報サービス、公共システムに至るまで「社会」と「生活」にかかわる全てのものにとって、今や欠かせないものになっていく。日立グループでは、社会貢献活動の一環として、ユニバーサルデザインを通じた教育分野への支援プログラムを実施している。

「ユニバーサルデザイン出前授業」では、ユニバーサルデザインの具体的な事例と体験を通して学んだこと、感じたことをもとに、子どもたちがグループにわかれて使いやすい製品を考案し、発表を行う。この授業を通じて「誰もが利用しやすい生活空間や地域社会の姿」誰もが暮らしやすい環境にするために、自分たちができることを考えるのがねらいだ。基本カリキュラムは、事例や体験を通じて学ぶユニバーサルデザインの基礎、テーマに沿って使いやすいデザインを考案するグループワーク、身近なユニバーサルデザイン製品の事例紹介、質疑応答という構成。視覚障がい体験では、袋の中に入ったリモコンを触ってそれが何かを当てたり、目を使わず手先の感覚だけで錠前をはずすゲームなどを行い、普段何気なく行っていたことが、障

がいのある方々にとってどれほど難しいかを身をもって学ぶ。学校の要望に応じて、地域の視覚障がい者をゲストスピーカーとして招き、体験を語っていただくこともある。障がいを実際に体験することで、障がいのある人への正しい理解も進み、「これからは外でも障がいのある人を見かけたら、積極的にお手伝いしたい」という声も聞かれるようになったという。

柔軟な発想で生まれるユニークなデザイン

グループワークの課題は「誰にでも使いやすいテレビリモコン」のデザイン。視覚障がい体験で感じたことを生かし、さまざまな人にとって使いやすいにするにはどうしたらいいかを班ごとにアイデアを話し合い、短い時間の中でひとつのデザインを作りあげていく。「リモコンを丸い形にして、他のリモコンと区別しやすいようにする」「頭で思い浮かべただけでチャンネルが変わる」「電池がなくなったら自動的に充電してくれる」など、たくさんの柔軟な発想がとびだし、秀逸なアイデアには周りから「おおっ」というどよめきが起こることも。全体発表でもユニバーサルデザインを意識することで、「ここに…これが…」という説明ではなく、「左上に丸いボタンがあって、その丸いボタンの右にスピーカーがあります」というような、誰でもわかりやすい話



授業名	全商品リサイクル活動
企業名	株式会社ユニクロ http://www.uniqlo.com/jp/corp/about/
コーディネート団体	地域教育推進ネットワーク東京都協議会(東京都教育庁)

- 実施地域：東京都
- 実施学年：高等学校
- 授業数：1時間から
- 必要な設備：特になし



分けを行う。実はこれが思いのほか大変な作業。支援先は、気候、需要の多いサイズ、宗教上好まれない色など詳細なニーズを調査し、決定する。事前のワークショップでそれを知っているからこそ、仕分けする生徒たちの目は真剣そのもの。武蔵高校の生徒会長(当時)は、「大変だったけど、達成感があった。来年の生徒会も活動を続けてくれたら」と振り返る。

こうして回収・仕分けされた衣料は、ユニクロ従業員の手によって、ネパールやエチオピア、グルジアなど世界の難民キャンプへ送られる。活動は、「衣料を渡して終わり」ではない。現地にはユニクロ従業員が、難民キャンプの方々の生の声を聞き、写真を撮り、活動の報告を学校へ送る。自分たちが起こしたアクションで誰かが笑顔になれるという実感と、その先にある問題への理解関心を深めるなど事後学習にもつながっていく。

学校とユニクロの協働による「全商品リサイクル活動」は、双方にとって重要な意味を持っている。国際貢献や環境活動への参加、地域との関わりから学生たちが得るものは計り知れない。同時に、目標3000万着の寄贈を実現するには、教育の現場で活動を知ってもらい、広めてもらうことが大きな力となるだろう。

年間約5億着の服を生産・販売する企業として、服の価値を最大限に活かしたい。その思いから、ユニクロは2001年に「フリースリサイクル活動」を開始。2006年には、回収対象をユニクロで販売する全商品に拡大した。活動を始めてみると、お客様からお預かりした衣料の多くが、まだまだ着られる状態。ならば、衣料を本当に必要としている人のもとへ届け、再び「服」として活かしてもらおう。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の協力を得て、世界の難民キャンプへの支援がスタートした。

これが、グローバルなCSR活動を指すユニクロの「全商品リサイクル活動」だ。全国のユニクロ店舗を窓口にし、お客様に洗濯済みの不要なユニクロ商品を持参してもらおう。回収した衣料の約9割は難民キャンプへ寄贈され、リユースできないものは、工業用繊維や燃料としてリサイクルされる。目標は、「世界の難民・避難民、約3000万人の方々に、一人一枚、ユニクロの衣料を届けたい」。これまでに回収した総数は約508万着にのぼっている。

年を重ねるごとに大きな広がりを見せるこの活動は、2009年、新たなステージへ。それは、都立高校と協働した取り組みだ。そのうちの1校が、都立美原高校。授業の一環として、希望者とともに高校生版「全商

「服のチカラ」を世界の難民キャンプへ
学校との協働による「全商品リサイクル活動」

>>> 担当コーディネーターからのひと言

梶野 光信
グローバル(グローバル+ローカル)な視点を持った市民育成を目指したプログラムです。参加した高校生たちは社会を身近な存在として、感じるようになってきたようです。

TEL03-5320-6853
地域教育推進ネットワーク東京都協議会 (東京都教育庁)
HP <http://www.syougai.metro.tokyo.jp/sesaku/schooling.html>
ml-c-net@section.metro.tokyo.jp

授業をおこなった企業の感想

回収目標は3000万着。世界の難民、避難民の方々に、1枚ずつ。5年後までに集め、届けていくことを目標としています。それを達成するためには、新しいネットワークの活用によって、活動を広げていく必要があります。今年度は、都立高校3校とともに取り組みました。難民キャンプの存在を知り、活動の意義を感じながら生徒たちが主体的に取り組めたこと、また地域の人々と触れ合う機会が持てたことは、大きな意義があると感じています。

授業を受けた子どもの声

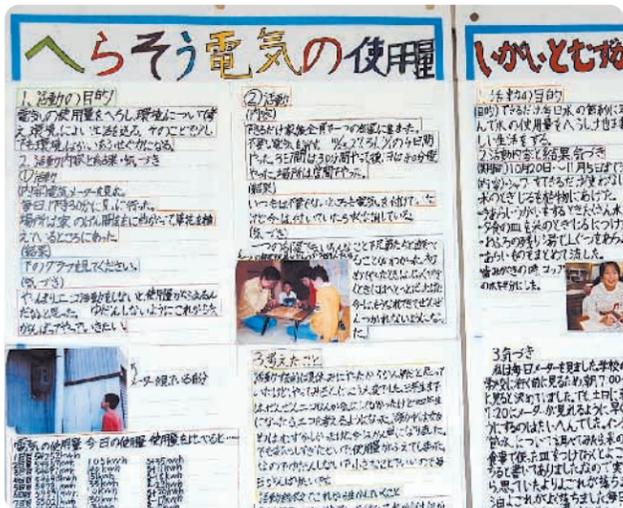
- 活動を通じて、人々の温かさ、難民の人の大変さ、みんなで一つのことをやりとげる喜びをしりました。(高校1年生)
- 仕分けが一番大変で辛くて本当に嫌だったけれど、私たちの活動で助かる人がいるということを支えに頑張りました。私はこれから先、この活動を忘れることはないと思います。(高校1年生)

ユニクロの服を身につけ、カメラに笑顔を向ける難民キャンプの人々。このような写真レポートが、活動を実施した高校へ送られる。ユニクロのウェブサイトでも報告を見ることができる。
写真撮影:上岡伸輔

品リサイクル活動」を実施した。まずはユニクロCSR部の従業員が講師となり、ワークショップを開催。難民キャンプの存在、衣料を受け取る相手のこと、衣料がどう役立つのかを高校生に伝えた。生徒たちにとって、衣料が果たす役割——防寒・防暑、安全、衛生、人間の尊厳——をあらためて理解する場にもなった。

その後、活動告知のポスターやチラシを製作。校内や地域への広報活動、回収活動を高校生主体で取り組むことで、地域の人々とのふれ合いの機会が生まれた。

また、都立武蔵高校では生徒会が中心となり、夏休みや文化祭の期間を活用しながら回収活動に挑戦。保護者や地域の協力により、目標を上回る枚数が集まり、総重量は516kgに。回収された衣料は季節、男女、上下などニーズごとに仕



同社が最もこだわる学習発表会。個々で学習して終わりでなく、学んだことをより多くの人に伝えてはじめて学びが深まり、子どもたちの心に学習の足跡が残る。

>>> 担当コーディネーターからの一言
神野 唯美・山本 茜
 どれだけ、先生方の支援につながるかが授業導入のポイントになります。このプログラムを各学校の学習目標や計画に加えることで、より学びが深まり、子どもたちの成長につながっていくため、先生方に好評です。

TEL052-881-4349
 (NPO法人アスクネット)
 HP <http://www.ask-net.org/>
 info@asknet.org

— 授業をおこなった企業の感想 —

- 児童・先生・地域の皆さん等からの応援に感謝しています。より多くの皆さんに環境を大切にしたいだけるよう、今後も活動を拡大していきます。(アイシン精機さわやかふれあいセンター担当者)
- 先生・地域の方々の支援の元で児童がエコ活動に取り組み、成長し、周りの大人にも環境保護の重要性を発信しはじめる。このような活動の一端に参画させていただき感謝するとともに、今後より広げていきたいと思ひます。(アイシン・エィ・ダブリュ・総務部 社会貢献グループ担当者)

— 授業を受けた子どもの声 —

- 私がゴミを捨てることで地球が壊れてしまふし、動物たちが死んでいく。動物、植物、人間にも「命」がある。私にできることはなにが考えたい。
- みんなで協力してやったらエコをするのが楽しかったし、たくさんすれば地球が喜ぶことを感じました。

授業名	あしたのために、地球のために《アイシン環境学習プログラム》
企業名	アイシン精機株式会社 http://www.aisin.co.jp/pickup/ecoschool/
コーディネート団体	NPO法人アスクネット

- 実施地域：愛知県刈谷市、安城市、碧南市、半田市、豊田市、西尾市、高浜市、[知立市、岡崎市は平成22年度より実施予定]
- 実施学年：小学校4～6年生
- 授業数：5時限
- 必要な設備：プロジェクター、ワークシート等



「座学」と「体験」を連動して理解を深め、様々な視点から環境の大切さを身近に感じる

愛知県の中部に位置する刈谷市は、トヨタ自動車の関連企業や工場が数多く集中する街。そんな愛知の自動車産業を支える企業のひとつが、自動車部品を中心に住宅設備機器やエネルギー機器、福祉機器の製造販売等を行なうアイシン精機(株)だ。

「社会・自然との共生」を理念に掲げる同社は、長年、環境負荷が低い製品の開発や、地域の環境保護活動にも積極的に取り組んでいる。そんな同社が学校教育のサポートに取り組み始めたのは平成18年。前年に開催された「愛・地球博」で、環境学習に取り組み地域の小学校と共同で行なったイベントがきっかけだった。子どもたちの成長は、一過性のイベントなどでは測りきれないことを感じた同社は、独自で教育支援ができないかと考えた。しかし教育に関する知識やノウハウがなかったため、愛知県のコーディネート団体アスクネットとともに、まずは同社が本社を置く刈谷市と工場のある安城市の小学校で環境学習を始めた。

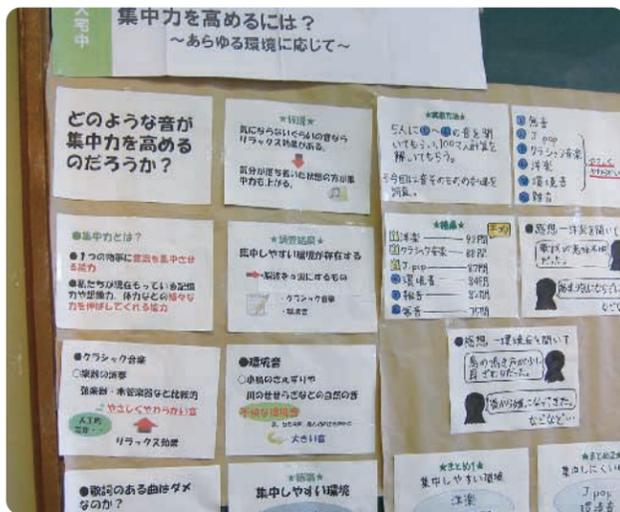
様々な動物や生物と共存しながら、自分たちも生きていくことを考える環境学習は、相手の立場に立つて物事を考え、行動する日常生活にも通じる。これは、将来、社会で働く上でも欠かせない。そこで、「アイシン環境学習プログラム」は「地球の仲間たちの声に耳を傾ける」をコンセプトに、学校、学年、クラスの学習目標や子どもたち

に学ばせたい内容に応じて、先生方は「森」「水辺」「暮らし」「産業」の4つのテーマから選択。各テーマに沿って「座学」と「体験」を「出前講座」で実施。さらに動物の気持ちになつて人間と生き物の関係を考える「シンパシーワークショップ」、自分たちの生活を振り返り、家庭や学校で身近なエコ活動に取り組み「エコアクション」、他学年や保護者、地域の人々に学習の成果を発表する「エトコクセッション」を実施した。こうした一連の学習を通じて、子どもたちは学習の意味を学び、実際の現場を目で見て、触れる体験を行い、理解を深め、成長していく。

同社からの教育支援の提案に、各学校は当初、企業の学校現場への参入や予算面等の心配もあったが、子どもたちに教室以外で様々な学びを体験させたいという思いが一致。また、この取り組みを「企業市民活動」と位置づける同社が、実施にかかるとなると、費用を負担するため学校からも感謝されるようになった。

「アイシン環境学習プログラム」は、地球の仲間たちの声を聞くこと、自分たちの生活を振り返り、家庭や学校で身近なエコ活動に取り組み、他学年や保護者、地域の人々に学習の成果を発表する「エトコクセッション」を実施した。こうした一連の学習を通じて、子どもたちは学習の意味を学び、実際の現場を目で見て、触れる体験を行い、理解を深め、成長していく。





写真は中間発表の様様。堀川高校で研究されている発表指導法を導入している。ポスター形式で仮説と方法論を見直し、最後には論文にまとめる。

中学二年生の職場体験を「生き方探究チャレンジ体験」と位置づけている京都市。今回JR西日本が取り組んだのは、この生き方探究チャレンジ体験を中心に事前学習としての講座と、事後学習としての課題研究・発表までがつながるカリキュラムである。学校と企業と大学が協力して行うこのカリキュラム・テーマは「働きがいと科学する」。

最初の講座は学校の先生のゼミから始まる。先生による働きがい講話は、たとえば国語では「伝記で読む偉人のやりがい」、社会では「フリーターの生活実態」など、通常の授業とはひと味違う内容。各教科と働くこととの関係を、先生が自分の言葉で語ることからスタートした。

次に企業が担当する講座は、JR西日本安全研究所の社員が行った。安全研究所は福知山線列車事故後、二度と重大な事故を繰り返さないとの決意から設立された組織。「いつでもどこでも」「だれでも」できる安全を現場とともに追求し、ヒューマン・ファクター（人的要因）の視点を中心として多角的に研究する組織である。

企業など大人向けに、安全管理体制や部下への安全指導などの講座を開催することは多いが、中学生向けの講座は彼らにとっても初めての中間発表会を行った。

たとえばヒューマン・ファクターの講座から「メモをとることが大事だ」と気づいた生徒は、「私たちにとってのメモとはノートだ」とノートのとり方について研究。本に紹介されている東大・京大生のノートと、自分のクラスの中間テストの成績の良い子と悪い子のノートの違いを研究して発表。あるいは「集中できる環境にふさわしい音楽について」や「江戸時代と今の生活の効率について」など、生徒一人ひとりがテーマと研究の途中結果について互いに発表しあう。発表を聞く側にまわったときは、一発表者のために「質問する。こうして再度、仮説の立て方や調べ方を見直したうえで、最後は論文にまとめる。先生のゼミから始まった二連の取り組みは、同社の協力を得て、学校の学びと社会との関係を考える機会とただただでなく、学びの意欲を確実に高めた。

同社にとっては初めての試みとなった今回の授業。他部署などもあわせて、今後はより教育への参加を進めていきたいという。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

石川 陽

「学ぶ意欲を高めるキャリア教育」に、企業と学校、教育委員会が一体となって取り組んだ好事例です。高校で成果のある指導法を中学に導入する実験的な要素もありましたが、心が強く動く体験ができました。

TEL075-315-3625
 (財)京都高度技術研究所
 HP <http://www.astem.or.jp/>
 E-mail career@astem.or.jp

■ 授業をおこなった企業の感想

駅での職場体験では、非常ボタンの扱い方など、知っておいてほしい安全に関する情報を伝えるいい機会となりました。今回一度に108人もの生徒を受け入れましたが、時間が少なく、中途半端な職場体験になってしまいましたので、今後はもっと少ない人数を数日間受け入れるような方向で考えたいですね。また自分の仕事について語ることで、社員のモチベーションがアップすることも期待できますので、今後も教育支援を行っていききたいと思います。

■ 授業を受けた子どもの声

- ヒューマンエラーの講義を聞いて、聴く力、人を大切に思うこと、安全性を考えたり、チームワークの大切さ、いろんな力があるって仕事ができることがわかりました。
- 「見えないところでも働いている人がいる」「女性社員でも男性並みの体力と集中力が必要」と聞き驚いたけれど、責任があるからがんばれると聞いて自分もそんな仕事してみたいと思いました。

授業名	「働きがいを科学する」
企業名	西日本旅客鉄道株式会社 http://www.westjr.co.jp/
コーディネート団体	財団法人京都高度技術研究所 (ASTEM)

- 実施地域：京都市
- 実施学年：中学校2年生
- 授業数：およそ40時間
(うち企業の講義は6時間)



講座と職場体験をもとに、生徒が自分で「働きがい」を探究していく

安全についてだけでなく「チームワークの重要性」や「安全研究所の仕事と意義」などを語った。講師自身の「仕事を選んだ理由」や「今の仕事と教科の勉強との関係」など、働きがいにもつながる内容となった。講師が事故について触れた時には、日頃の授業では私語が目立つ生徒もじっと静かに聴き入ったという。

事前学習の最後は大学教員の講座。京都大学総合博物館の准教授から、「研究とはなにか」について講義を受けた。こうした講座や五日間の生き方探究チャレンジ体験を経ながら、「働きがい」というテーマに則って自分で設定した課題について研究活動を進める。

という手はずだったが、折からの新型インフルエンザの影響で、受入先の3分の1を占める保育園などから断られ、五日間の職場体験が中止に。急遽、JR西日本京都駅で半日間職場体験を行う。

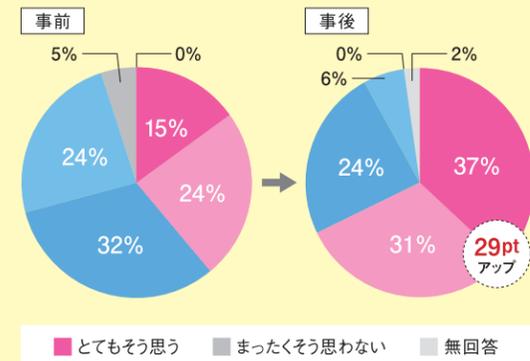
JR西日本京都駅での「安全をめざす仕事の働きがい」。関連会社の協力も得て、助役の構内巡回訓練室での切符発券・車いす介助体験・忘れ物センター業務・特急の車内清掃などさまざまな体験を行った。

緊張の「安全管理の現場」体験後、生徒の探究活動は講義と体験のすべてを活用する本番へ。論文にまとめる直前に、ポスター形式によ



■グループでの活動について

自分の思いや考えを「まちがいをおそれずに伝える」ことができますか？



子どもと親しくなれるように「はかせ」などのニックネームを胸につけたり、プレゼンではカツラをかぶったり。子ども目線に立つことを大切にしたい。

今回はポンプや噴水、ロケットの仕組みも含め、実際のものづくりの専門家に教えてもらったことで、子どもたちの学びは深まったという。また彼らの姿を見て「働く」ということを身近に感じることができるようになった。

参加三日目となる最終日は、ものづくりで素晴らしい成果を出した子どもたちに、手作りの表彰状と自社で製造した「メダル」を贈呈。

「予想以上の反応が返ってきて、自信が沸いてきました。気づけば自分が子どもたちから学んでいた」というメンバーたち。

終了後の社内発表会で、植木リーダーはこんな言葉を発した。

「魂を込めてものづくりの大切さ、楽しさをもう一度考えていく必要があると思っています。その先に我々の感動と、お客様の感動が待っている。決してやらされている仕事に感動はない。ドリカムスクールでの活動を通じて、子どもたちの姿を見て、改めてそう感じました」

>>> 担当コーディネーターからのひと言

池田 直子

この授業を通じて、子どもたちに、「世界で活躍するポンプを作って、みんなの笑顔のために頑張ってくれている人たちが身近にいることが伝わったと思います。

TEL06-6100-3242 ※4月末、移転予定
(JAE/NPO法人日本教育開発協会)
HP <http://www.jae.or.jp/>
info@jae.or.jp

■授業をおこなった企業の感想

- 普段は設計の仕事をしているが、今回「授業」という製品を自分たちで設計・製作・実行したことで、仕事においてもさまざまな部署を経験したいと思うようになりました。
- 一緒に苦しんで頑張るって、初めてチームワークが生まれるんだと知った。
- 他人とのつきあいが苦手ですが、今回のチームで自分の主張だけでなく相手の意見を聞く大切さがあり、メンバーとの間に深い絆ができました。

■授業を受けた子どもの声

- ものづくりは一人じゃできないということがわかった。どんな時もチームワークは大切だと思った。
- はかせやリエさん、いろいろな人がいっぱい教えてくれたの勉強になった。
- ロケット作りが成功したし、とても楽しかった。全部わすれないようにしたいです。

授業名	ドリカムスクール「飛ばせ みんなの夢と希望！」
企業名	株式会社西島製作所 http://www.torishima.co.jp/
コーディネート団体	NPO法人JAE(日本教育開発協会)

- 実施地域：大阪府
- 実施学年：小学校4年生
- 授業数：2時間×3日
(プラスして学校内での補講あり)
- 必要な設備：プロジェクター、スクリーン、ドライバー、ペットボトル加工用のはさみ



「教えることは最大の学びである」子どもと一緒に若手人材も半年かけて学ぶ

西島製作所は、公共用・産業用のポンプ製造・販売を行う創業九十年を超える東証一部上場企業である。同社が参加した「ドリカムスクール」は、コーディネーター団体・JAEが実施しているキャリア教育プログラムである。ドリカム、という名前の通り「夢を描いて、チャレンジする力を育むこと」を目標とする。

同社がドリカムスクールに関わるのは今年で二年目。各部署から二名ずつ選出された若手社員9名でチームを結成、自らの会社や仕事を題材に授業を行う。「どんな授業にするのか、何を伝えるのか」というテーマ設定から具体的なプログラムづくりまで、コーディネーターの支援を受けながらも、社員が半年がかりで行う。

同社では、この教育活動を社会貢献としてだけではなく、社員研修の一環として位置づけているのだ。

二年連続してこうした形で行う理由は、もちろん一年目に大きな成果が出たからに他ならない。子どもたちの笑顔、アンケートでわかる変化、感動的な感想。

そして、こうした経験を経た二期生たちにも確実に成長が見えた。通常の仕事をこなしながら課外

活動としての授業準備。ほとんど話したこともない人たちとの共同作業。社内リハールでの失敗…。もちろん日常的な仕事の中でも成長はするが、「非日常」の困難を乗り越えることで、自信をつけた社員たちは大きく成長するという。

また先生方の「世界でひとつしかないもの(ポンプ)を作る場所にいるのは本当に興味深い」という言葉などから、改めて自分たちの仕事の意味を知る。自社の事業や他部署業務の理解が進み、チームでの活動を通して横のつながりができる。これらが実務にもよい影響を及ぼしているのだ。

理科の教科書のペットボトルロケットが題材

彼らが作り上げた今回の授業のコンセプトは「楽しいものづくりを通じて、オ(感動)を伝える」。

「水クイズ、会社紹介、ポンプクイズ、ものづくりの実演」「飛ばせみんなの夢と希望！」(ものづくり)「実技大会とポスター発表」「働く人の思いを語る」を、計三日間の出前授業で実施。ペットボトルポンプ、ヘロン噴水、ペットボトルロケットを題材にしたものづくりと、その性能やデザインを競う実技大会、ポスターによるプレゼンテーションを組み合わせた授業である。ペットボトルロケットは理科の教科書にも載っているが、教員だけで教材づくりから実験までを行うには困難が伴う。

授業名	“住まいと環境”学習プログラム
企業名	積水化学工業株式会社 http://www.sekisui.co.jp/
コーディネート団体	株式会社キャリアリンク

- 実施地域：関西、関東、九州
- 実施学年：中学校
- 授業数：7時限
- 必要な設備：ビデオカメラ、プロジェクター、スクリーンなど



プログラムの構成【7時限の場合】

※ 共同授業 は教員とエコハイムコーチによる共同実施

STEP 1 (50分×2時限)	STEP 2 (50分×2時限)	STEP 3 (50分×3時限)
住まいの役割を考えよう <small>教員による授業</small> ①「いい家」って何だろう？ <small>教員による授業</small> ②住まいの役割って何だろう？	住まいのエコの秘密を探ろう <small>共同授業</small> ①住まいの一生と環境のかかわり <small>教員による授業</small> ②人の暮らしと環境のかかわり	MYエコハイムをつくろう <small>共同授業</small> ⑤いい家づくりに大切な視点 <small>教員による授業</small> ⑥⑦MYエコハイムをつくる

家づくりのプロから学ぶ環境と共生する住まいと暮らし

住宅事業を手がける積水化学グループでは、事業特性を活かした教育支援を目的に、中学生を主な対象として、「住まいと環境」に関する学習プログラムを提供している。単なる出張授業ではなく、先生方が主体となって授業を実践いただける支援教材を提供するとともに、積水化学グループの従業員が環境に配慮した家づくりの「プロ」エコハイムコーチとして、授業をサポート。住宅づくりで培ったノウハウ、環境に関する知見を活かして、環境と共生する住まいと暮らしについて考えて、行動する取り組みに力を入れている。

「住まいと環境」学習プログラムでは、住宅の一生(ライフサイクル)の視点から住宅の役割を考え、環境負荷を低減する住まい方の工夫や、快適な住空間を支える技術の工夫について学ぶ。さらに、住宅の模型を使って環境に配慮した家づくりに関して学習するなかで、学習で得た知識や考え方を統合して、環境と共生する住まいと暮らしへの価値観を形成することをねらいとしている。

プログラムを実施された先生からは「単元構成がしっかりとおり、初期の授業から最後の模型づくりの授業までつながっているのが素晴らしいと感じた。」「自分たちが試行錯誤して作った作品をプロの視点から評価していただき、満足した生徒の表情が印象的だった。」「専門家であるエコハイムコーチの「建築に対する思い」が十分に生徒に伝わった授業だと思っ。」との感想が寄せられた。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

本家 未央
 セキスイハイムのミニチュア模型を使ってプランを考え、家づくりのプロからアドバイスをもらえることは、住まいと環境のかかわりについて深く学ぶのにとっても効果的です。

授業を
したいなら
こちら

TEL06-6251-6001
(株式会社キャリアリンク)
 HP <http://www.lab-warp.ne.jp/>
 E-mail jugyo@lab-warp.ne.jp

授業をおこなった企業の感想

- プロの目から見ても住みたいと思う家があった。
- 生活環境も意識した提案があって驚いた。
- 生徒のみなさんが喜んでくれたことで、自分自身も元気をもらった。

授業を受けた子どもの声

- 自分の家や友達の家をじっくり観察するようになった。
- 授業で行ったエコの工夫を自分でやってみた。
- 自分たちが作ったプランを褒められてうれしかった。

授業名	「教育ルネサンス ことばの授業」
企業名	株式会社読売新聞東京本社 http://info.yomiuri.co.jp/edu/
コーディネート団体	NPO法人企業教育研究会

- 実施地域：全国
- 実施学年：小学校3～6年生、中学校、高等学校、大学
- 授業数：2時間(連続)
- 必要な設備：パソコン、プロジェクター、スクリーン、スピーカー、筆記用具(無い場合はNPOで用意いたします。)



(c)読売新聞社

新聞記者の持つ技術を全国の学校へ届ける

「読む」「書く」「聴く」をはじめとする子どもたちのコミュニケーション能力を伸ばすとともに新聞に親しんでもらうことを目的に始まった「教育ルネサンス ことばの授業」は、読売新聞の記者とNPOのスタッフ(主に教員養成課程の大学生)が全国の学校を訪問して、出前授業を実施するプログラムだ。

新聞記者の仕事の中から、「インタビュー」する「記事を書く」「見出しをつける」といった技術を、教室の中で手本を見せながら伝授。その後、子どもたちが記者にならうって体験するという構成になっている。国語や社会科をはじめ、調べ学習や課題発表、社会科見学の事前学習など、様々な位置づけで実施できるのがポイントだ。

授業では、プロの記者からの「新聞記者になつてみよう」という呼びかけに、子どもたちは生き生きと応じて、作業に取り組んでいる。大人に対して真剣に質問する姿や、架空の事件映像を見ながら短時間で熱心に記事を書きあげていく姿が印象的だ。

また、高校生向けには、新聞の人物紹介コラムの形式で自分を紹介する文章を書くプログラムも開発している。生徒同士でインタビューをしながら、その内容を文章にまとめ上げる作業は、生徒にとつてこれまでの歩み振り返り、将来を見据えるという機会になっている。

授業の実施に関する費用は無料。授業内容をまとめた教材DVD付きの冊子も希望する学校に無料で配布している。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

西條 正倫
 プロの記者から直に仕事を教えてもらえる機会というのはめったにないと思います。そのため、子どもたちはとても意欲的で、授業をする私どもの姿に刺激されています。

授業を
したいなら
こちら

TEL043-308-7229 (NPO法人企業教育研究会)
 TEL03-3217-1967 (株式会社読売新聞東京本社 教育支援部)
 HP <http://ace-npo.org/info/kotoba>
 E-mail kotoba@ace-npo.org

授業をおこなった企業の感想

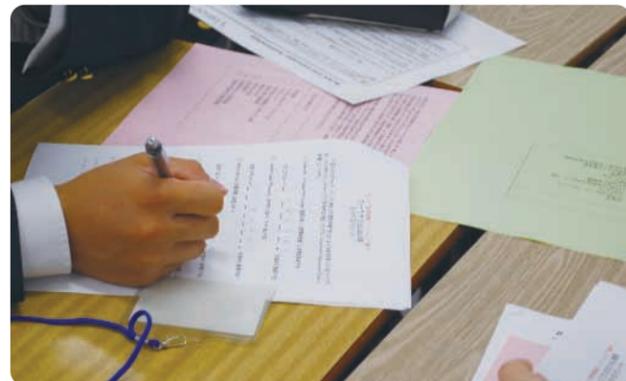
新聞記者が日ごろ当たり前のように行っている「取材」「記事執筆」「見出し作成」。こうした活動が子どもたちの言語能力の向上につながる「ことばの授業」は、新聞社ならではの社会貢献です。例えば、保護者などへのインタビューを通して、身近な大人の仕事への真摯な思いに気づき、働く意義について考える子どもも多く、体験に勝る学びはないと実感しています。記者の仕事を経験することで多くの子どもたちに新聞の魅力を知ってほしいと願っています。

授業を受けた子どもの声

- 今までインタビューは苦手だったけど今日の授業をしてインタビューが好きになり、母にもインタビューをしました。新聞記者になりたいと少し思いました。(小学4年)
- 記事を書くのは少し戸惑ったけど、後から言葉が少しずつすんなり出てくるようになった。作文より楽しかったし、いい経験にもなった。(中学1年)

授業名	企業が求める“リーダーシップ”体験授業
企業名	アメリカン・エクスプレス・インターナショナル, Inc. http://www.americanexpress.co.jp
コーディネート団体	株式会社ソシオ エンジン・アソシエイツ

- 実施地域：東京都
- 実施学年：高校2年生
- 授業数：2時間
- 必要な設備：ワークシート等



近年の新卒採用では、そのプロセスの中でグループディスカッションを取り入れる企業が増えている。組織における人間関係構築力、組織としての課題解決力、「聴くこと」も含めたコミュニケーション能力が、人材要件として求められていることである。

この授業では、アメリカン・エクスプレス・インターナショナル・Inc.の採用で行われているグループディスカッションを高校生が体験。企業の求める人材要件、とくに「リーダーシップ」とは何かを感じることを目的とした。題材は「月で遭難した時どうするか」。ディスカッションを通してメンバーの合意を得た上で、時間内にひとつの答えを出すというミッションを果たさねばならない。

グループディスカッションのあとは、ひとりひとりの「リーダーシップ」についての振り返りの時間。いくつかの項目にしたがって、リーダーシップをどれくらい効果的に発揮できたかを振り返ってみる。教室内をまわるゲスト講師（社員）との対話の中では、様々なリーダーシップの発揮の仕方があるという気づきも生まれた。

またこの授業では、企業が何を目的に活動しているのか、めざすことやあり方についての講義を通して、企業の「しくみ」への理解を促すことができた。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

松倉 由紀
企業の人材要件は、高校生の生活の中でも身につけられるもの。高校・大学の先にある「社会」とのつながりが感じられる授業をご提供いただけたと思います。

TEL03-5775-7670
((株)ソシオ エンジン・アソシエイツ)
HP <http://www.socioengine.co.jp/>
✉ jobinfo@socioengine.co.jp

授業をしたのなら
こちら

— 授業をおこなった企業の感想

- 多様な意見をまとめて、限られた時間内に求められる結果を導き出すという経験が、今後、様々な局面で思い出され、役立つことを祈ります。
- 限られた時間の中で高校生にアメリカン・エクスプレスで求められるリーダーシップを身近な行動として体験してもらうために、どんな研修デザインや説明が適切かをずいぶん考えました。いくつかのグループをのぞいてみたところ、リーダーシップ行動を理解し、ディスカッションの中で発揮できていたようです。

— 授業を受けた子どもの声

- 人の話を聞けるというのもリーダーシップの一つということを知りました。
- 人に意見を言うのは勇気がいることでした。
- 企業は自分たちのことだけでなく、社会のことも考えていることがわかった。

授業名	社会人のタネの育て方～未来パスポート編
企業名	焙茶工房しゃおしゃん 滝沢村商工会 http://www.8.plata.or.jp/xiaoxiang/ http://www.shokokai.com/takizawa/
コーディネート団体	NPO法人未来図書館・学びあい支え合いキャリア教育支援ネットワーク

- 実施地域：岩手県
- 実施学年：小学校4年生～高校3年生
- 授業数：2時間
※成長段階によって3回シリーズまで実施可能
- 必要な設備：プロジェクター、スクリーン、パソコン、DVDプレーヤー、デジタルカメラ他
※社会人によって設備が異なる



子どもたちは自らの夢を描く動機づけとして、大人は仕事や生き方への姿勢を振り返り、自身の言葉で伝える貴重な機会でもある。また、子どもたちと社会人が相互に学ぶこの機会を活用することにより、産業界では地域での企業の役割を示すなどの社会貢献としての意味合いに加え、企業研修として人材育成の機会も提供できる。学校の要望により、食育や環境教育・人権教育・安全教育などを効果的に結びつけることが可能であり、上級編となる「かだるプログラム」では、社会的課題（例…自殺・ネット犯罪など）について子どもたちと大人が意見を交換するプログラムも用意されている。

岩手県内の多様な職業・生き方を持つ社会人と子どもたちがふれあい、相互に学びあうプログラム。実施内容は、社会人が設置したブースへ、「未来パスポート」を持った子どもたちがグループに分かれて訪れるというもの。ブース内では、社会人がそれぞれの仕事の内容や思いを伝える工夫を凝らし、デザイナー・和菓子職人などの職種では実技を交えての交流が行われることも。終了後は、出会った社会人について感じたことや自分自身の将来について考えたことなどを話し合い、グループごとに発表を行って感想をシェアする。

多様な職業と生き方に触れる

>>> 担当コーディネーターからのひと言

恒川 かおり
多様な大人とのふれあいは成長段階ごとに感じ方が異なり、小学生から高校生まで何度でも行いたい内容。子どもたちが憧れたり、ほっとできる大人を身近に増やしていきたいです。

TEL019-654-6601
(NPO法人未来図書館)
HP <http://www.miraitoshokan.com>
✉ tsunekawa@miraitoshokan.com

授業をしたのなら
こちら

— 授業をおこなった企業の感想

- 思いがけず出会った生徒たちの幸せを祈る気持ちが芽生えていました。先生方は生徒を思う大きな祈りの中で日々仕事をしているのだと改めて思います。多様な価値観や職業観を持つ社会人がどんな話をするのか、それをどう受けとめるのか、リスクを考えながら丸ごと受け入れ、生徒それぞれの未来を願う先生方の懐の深さに感銘を受けました。
- ふれあった子どもたちは夢や希望を持ち、いきいきしている。それを引き出していくことが大切だと感じた。

— 授業を受けた子どもの声

- 大人はおれらと違って軸のある「想い」を持って生きていると思った。大人は夢を持っていないと思っていたけど、話を聞くと持ち続けているようだった。おどろいた。(高校1年/男)
- 獣医になる大変さやデザイナーへの道のりなど参考になった。自分の進路をしっかりと考えたい。(高校1年/男)

授業名	出前講座
企業名	本州四国連絡高速道路株式会社 http://www.jb-honshi.co.jp/
コーディネート団体	特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク

- 実施地域：東京都及び近郊
- 実施学年：中・高校生
- 授業数：1時間
- 必要な設備：プロジェクターなど



架橋もたらす変化や歴史的背景を学ぶ

瀬戸内海に架かる3本のルート（瀬戸大橋、明石海峡大橋、しまなみ海道）について、社会科及び土木技術の2つのメニューから学べる出前講座。例えば、社会科の授業の二環で行う場合、架橋に至るまでのさまざまな歴史的背景について学んだり、瀬戸内海で隔たれた四国と本州地域の特徴を知り、なぜ瀬戸大橋を作る必要があったのかについての理解を深めることができる。また、産業・交通・観光などの観点から、橋の完成による地域社会や生活の変化などについても学習できるプログラム作りがなされている。土木技術中心のメニューでは、世界最長の明石海峡大橋を作り上げた技術、今後200年の維持管理に関する技術などを、橋梁土木や専門分野に踏み込んで紹介。落橋の瞬間の映像を見て、風が橋におよぼす影響を学習したり、橋の部品の一部に触れ、その重さや丈夫さを体感できるなど興味を持って学べる工夫がこらされている。

学年によっては社会科の教科書でも取り上げられている「瀬戸大橋」ができるまでの経緯や、橋が開通したことによる変化を映像や実物などで知ることで、橋がもたらす多大な効果や可能性を身近に感じられる。これらのメニューは学校の要望により、ある程度のアレンジが可能だ。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

生重 幸恵
本州と四国を結ぶ「本四連絡橋」の建設意義や社会貢献についてさまざまな観点から紹介&質疑応答を展開し、生徒が社会の一員として自覚をもつような講座です。

TEL03-5347-2372
(特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク)
HP <http://www.sanet.jp/>
info@sanet.jp

授業をしたいならこちら

授業をおこなった企業の感想

平成19年からスタートした「東京事務所出前講座」。東京都やキャリア教育コーディネーターの方々と連携をとることにより、講座を実施する学校や講座のメニューを年々充実することができました。本講座が「社会貢献の精神の育成」や「子どもの社会的自立への支援」に貢献できるようこれからも頑張ります。本年度は、東京近郊での講座開催も視野に入れておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

授業を受けた子どもの声

●(「国際協力」の講義を受けて)困っている人には「親切に」「挨拶を丁寧に」「いつもニコニコ」ということを頭におき、将来のために勉強を頑張りようと思いました。私も国際協力のために海外に行けるようになれたらいいなと思いました。(高校2年/女)

授業名	企業で求める人材像～人材育成プログラム体験授業
企業名	アデコ株式会社 http://www.adecco.co.jp/index.html
コーディネート団体	株式会社ソシオ エンジン・アソシエイツ

- 実施地域：東京都
- 実施学年：高校2年生
- 授業数：2時間
- 必要な設備：ワークシートなど



異なる価値観の人々と『協働』を体感する

企業とは、異なるバックグラウンドを持つ様々な人がともに働く場。自分と同じタイプの人だけではなく、違った価値観の人と一緒に働くためには、相手を尊重し、自らの役割を認識して行動することが必要になる。そのため、アデコ株式会社では人材育成の重点ポイントとして「異なる価値観を持つ様々な人との協働」をあげている。

このような人材育成の視点を、本格的な受験勉強に向かう前の高校2年生に「体感」してもらい、大学の「その先」にある「企業で求められること」を意識させることを目的に、授業では高校生がアデコ株式会社の社内人材育成プログラムを体験した。

企業の情報や求められるスキルについての講義を聞いた上で、ワークショップへ。それぞれの情報カードをもった5人が、他のメンバーと情報を共有しながら、野球チーム9人のポジションを推測していくもの。それぞれが持つ情報を、いかに「効果的に」「効率的に」全員で共有できるかがカギになる。求められるのは「コミュニケーション能力」「チームワーク」「協調性」…。企業で求められる様々な能力の重要性を体感することができ、社会に出る前の、「高校→大学の過ごし方」を考えるきっかけにもつながった。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

松倉 由紀
ふだんの人材育成プログラムを、なるべく「そのまま」学校で実施していただき、高校生に少しでもリアルな「企業の姿」を感じてもらえることをめざしました。

TEL03-5775-7670
(株)ソシオ エンジン・アソシエイツ
HP <http://www.socioengine.co.jp/>
jobinfo@socioengine.co.jp

授業をしたいならこちら

授業をおこなった企業の感想

●自分の意見を言うことに恥ずかしさを感じる年頃ではありますが、多種多様な価値観を持った人材が、それぞれの役割・責任を全うすることにより素晴らしい「チームワーク」が発揮されることを感じていただけたと思います。

●このような機会が増えることで、高校生が社会に興味を持ち、民間企業は高校生の教育現場を知ることが出来、将来の「適切な就職」に効果が上がると感じました。または是非参加したいと思っています。

授業を受けた子どもの声

●グループワークはむずかしかったが、チームワークの大切さを知った。

●人とコミュニケーションをとるのはむずかしいと思った。

授業名	車が利用者に届くまで
企業名	株式会社トヨタUグループ
コーディネート団体	子どもの未来創造協会

- 実施地域：長野県
- 実施学年：小学校5年生
- 授業数：2時間から4時間
- 必要な設備：スクリーン、プロジェクター



私たちの身近にある車。どんな人が関わってひとつの車が出来上がるのか、子どもたちに知ってもらうために、日産の現役カーデザイナーが、車の楽しさとカーデザイナーという仕事の醍醐味を伝えていきます。

まず、車がどのように作られるのか、パワーポイントを使って説明します。次に、その過程の中でカーデザイナーがどんな仕事をするのか、ある商品のケースを例に、デザインが出来上がるまでを分かりやすく説明します。本物の車のデザイン画を見ることができ、カーデザイナーの仕事より具体的に捉えることができるでしょう。

最後に、「自分が将来乗ってみたいと思う車」をテーマに子どもたちが事前に描いた絵の中から数点を選び、デザイン作業のデモンストレーションが行われます。選ばれた作品を描いた子ども自身が、絵のコンセプトを説明したのち、カーデザイナーは紙とペンを使い、立体的な絵を描いていきます。その様子を目の当たりにした子どもたちは驚くばかり。教室のあちこちで歓声があがります。

一般的な工場見学ではなく、カーデザイナーという普段接点の少ない職種を経験することにより、子どもたちの仕事に対する考えが広がるのではないのでしょうか。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

小寺 良介
工場見学が困難になってきた今、身近にある販売店で「間近で見て・音を聞いて・その場で説明を聞く」社会科の授業にもキャリア教育にも学びの多いプログラムだと感じた。

TEL03-5795-0510
(子どもの未来創造協会)
HP <http://www.kodomo-mirai.org/>
✉ kodera@kodomo-mirai.org

授業をしたいならこちら

— 授業をおこなった企業の感想

- 地球環境に対して、小学5年生が1人1人良く考えている姿を見て我々も大変勉強になりました。
- 小学生の「地球を守りたい」という純粋な思いが、たくさんの人に伝わることを願っています。
- 今回子どもたちの学習をお手伝いさせていただき、普段の仕事では経験出来なかった新しい領域に一步踏み出せましたし、新しいことへのチャレンジは、私自身を成長させてくれました。今後も子どもたちをはじめ、地域のみなさんのお役に立てる事に積極的に取り組んでいきます。

— 授業を受けた子どもの声

- 車だけでなくお店もエコでビックリしました。車の下やボンネットの中もじっくり見れて良かったです。これからは仕事がんばってください。
- 僕は工場の中は少しよごれているイメージがありましたが、すごいきれいでビックリしました。これからは頑張ってください。

授業名	日産デザインわくわくスタジオ
企業名	日産自動車株式会社
コーディネート団体	子どもの未来創造協会

- 実施地域：神奈川県
- 実施学年：小学校5、6年生
- 授業数：2時間
- 必要な設備：パソコン、プロジェクター、スクリーン



私たちの身近にある車。どんな人が関わってひとつの車が出来上がるのか、子どもたちに知ってもらうために、日産の現役カーデザイナーが、車の楽しさとカーデザイナーという仕事の醍醐味を伝えていきます。

まず、車がどのように作られるのか、パワーポイントを使って説明します。次に、その過程の中でカーデザイナーがどんな仕事をするのか、ある商品のケースを例に、デザインが出来上がるまでを分かりやすく説明します。本物の車のデザイン画を見ることができ、カーデザイナーの仕事より具体的に捉えることができるでしょう。

最後に、「自分が将来乗ってみたいと思う車」をテーマに子どもたちが事前に描いた絵の中から数点を選び、デザイン作業のデモンストレーションが行われます。選ばれた作品を描いた子ども自身が、絵のコンセプトを説明したのち、カーデザイナーは紙とペンを使い、立体的な絵を描いていきます。その様子を目の当たりにした子どもたちは驚くばかり。教室のあちこちで歓声があがります。

一般的な工場見学ではなく、カーデザイナーという普段接点の少ない職種を経験することにより、子どもたちの仕事に対する考えが広がるのではないのでしょうか。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

小寺 良介
この授業のきっかけは、日産自動車の方々から「クルマの魅力とカーデザイナーという仕事の醍醐味を肌で体感してもらい、職業観の形成に役立ててもらいたい」と言われたのが始まりです。社会や国のため貢献していく姿勢が素敵です。

TEL03-5795-0510
(子どもの未来創造協会)
HP <http://www.kodomo-mirai.org/>
✉ kodera@kodomo-mirai.org

授業をしたいならこちら

— 授業をおこなった企業の感想

- 子どもたちがとても感動し「夢を持つ事の大切さ」を感じてくれたことがとても嬉しいです。子どもたちの素直な反応に私自身も純粋な気持ちにさせられました。
- 授業を通じ改めて子供たちの無限大の可能性を知ることができます。社会貢献という概念なく夢と希望と感動を純粋に伝えられるものが「ここ」にあると感じます。
- 多くの可能性を秘めた小学校の生徒さんたちの、興味深々で「わくわく」した熱い眼差しに、素直に感じること、伝えることの大切さを実感させてもらいます。

— 授業を受けた子どもの声

- デザイナーさんのイラストは、今にも動き出しそうだった。
- 絵が上手だった!
- すごく細くて薄い鉛筆で下書きするんだなあと思った。
- 立体的になってすごいと思った。

車はどうやって出来るデザイナーの仕事って

授業名	ドリカムスクール 「20年後(または50年後)の未来の家を考えよう!」
企業名	大和ハウス工業株式会社 http://www.daiwahouse.co.jp/
コーディネート団体	JAE(NPO法人日本教育開発協会)

- 実施地域：大阪府大阪市
(大阪市立鶴見商業高等学校)
- 実施学年：高校1年、3年生
- 授業数：16～20時限
- 必要な設備：プロジェクター、スクリーン、スケッチブック、マジック



1年生を教える中で、自分をみつめ直す3年生

鶴見商業高校では平成21年度から1年生全員が参加する12の「チャレンジ講座」を実施している。その中の一つが、大阪市に本社を構える大手住宅総合メーカー「大和ハウス工業」と、コーディネーター団体「JAE」による夢を描いてチャレンジする力をはぐくむ「ドリカムスクール講座」だ。住まいの専門家として教育現場に貢献したい同社の思いと、生徒たちが主体となって社会の課題解決に取り組む機会にしたいという学校側の願いを総合し、うまくいった授業は「20年後の未来の家を考えよう」。1年生13名が、未来の理想の家に、建築のプロから学び、同社へ企画の提案までを経験する。さらに担当の先生からのアイデアにより3年生6名が1年生へ授業を行うことになった。授業ではまず、3年生が職場訪問して担当者や授業内容の打ち合わせや住宅展示場を見学。同社の仕事内容や住まいづくりで大切にしている考え方や工夫を吸収し、1年生へ説明すると、いよいよチームに分かれて企画立案だ。3年生はファシリテーターとして話題を振るものの、1年生はなかなか意見を出し合えない。しかし授業を進めるうち、自ら意見を出し合うことを恐れず、他者の考えを聞き、話を深めることを面白がる様子が見られた。また3年生は企業の担当者や他学年との交流により、働く意味やコミュニケーションの大切さを学んだようだった。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

池田 直子
地球環境問題や災害、少子高齢化などの社会課題…。実は生徒に身近な家や住まい作りに、その課題解決につながる工夫があることを住まいの専門家から学びました。

TEL06-6100-3432 ※4月末、移転予定
(JAE(NPO法人日本教育開発協会))
HP <http://www.jae.or.jp/>
info@jae.or.jp

授業をしたいならこちら

— 授業をおこなった企業の感想

私自身もドリカムスクールを初めて経験したときは、意見を言う難しさを感じました。以前は企画部門におらず、自分から意見を言う経験が少なかったのですが、意見をいろいろ出すなかで、最初は1人で考え浮かばないことでも、議論を煮詰めていくことで形になっていくスゴさを実感しました。みんなで意見を出し合って解決することは、ドリカムスクールに限らず、いろんな場面で今後必要になってくることだと思います。(CSR推進室担当者)

— 授業を受けた子どもの声

●今、自分が住んでいる家も、たくさんの方がアイデアを出して出来た家だということが分かり、それを思うとほんとうにすごいなと思いました。

●1年生に教える体験で初めてプレゼンして、人に伝えることの難しさを学びました。意見をたくさん出すためにはどんな意見も否定してはいけないことも学びました。

授業名	「めざせ21世紀型ものづくり」プロジェクト
企業名	株式会社 豊田自動織機 http://www.toyota-shokki.co.jp/
コーディネート団体	NPO法人アスクネット

- 実施地域：愛知県東浦町
- 実施学年：小学校5年生
- 授業数：3時限+α
- 必要な設備：プロジェクター、ワークシートほか



ものづくりの精神から環境問題を見つめる

自動車1台をつくるために必要な部品のひとつに「コンプレッサ」がある。これはカーエアコンの起動に欠かせないパーツであり、数百〜千個の部品でできているのだが、さらにその中のピストン部分の製造を担うのが、愛知県の中部にある東浦町の工場である。工場では学校などからの依頼で見学を実施しているものの馴染みの薄い部品である故、子どもたちには理解が難しく、また豊田自動織機がどんな会社なのかさえ知られていないのが現状だ。そこで、ものづくりをより身近に感じてもらえるよう、事前学習として、社長の豊田佐吉翁の少年期からの生き様と、ものづくりに対する志を学ぶ授業を実施。工場見学では、製造における環境・安全・ムダのないものづくりへの工夫を実感できる内容を目指し、部品が仕上がるまでの環境への取り組みや働く人たちの思いにスポットを当てた。学校での実施がしやすいよう社会科の授業と連動してプログラムを作成。他にもコンプレッサの仕組みや排水浄化の仕組みをわかりやすく理解してもらうため、理科実験を導入して説明する時間も取り入れた。見学中はクイズを出題しながら進めたことで、児童たちに集中力をもたせ、工場見学終了後もワークシートを活用しながら、学校活動の中にあるムダを積極的に見つける姿勢や、働く人々への興味を持つ姿も見られた。

環境問題を見つめる

自動車1台をつくるために必要な部品のひとつに「コンプレッサ」がある。これはカーエアコンの起動に欠かせないパーツであり、数百〜千個の部品でできているのだが、さらにその中のピストン部分の製造を担うのが、愛知県の中部にある東浦町の工場である。工場では学校などからの依頼で見学を実施しているものの馴染みの薄い部品である故、子どもたちには理解が難しく、また豊田自動織機がどんな会社なのかさえ知られていないのが現状だ。そこで、ものづくりをより身近に感じてもらえるよう、事前学習として、社長の豊田佐吉翁の少年期からの生き様と、ものづくりに対する志を学ぶ授業を実施。工場見学では、製造における環境・安全・ムダのないものづくりへの工夫を実感できる内容を目指し、部品が仕上がるまでの環境への取り組みや働く人たちの思いにスポットを当てた。学校での実施がしやすいよう社会科の授業と連動してプログラムを作成。他にもコンプレッサの仕組みや排水浄化の仕組みをわかりやすく理解してもらうため、理科実験を導入して説明する時間も取り入れた。見学中はクイズを出題しながら進めたことで、児童たちに集中力をもたせ、工場見学終了後もワークシートを活用しながら、学校活動の中にあるムダを積極的に見つける姿勢や、働く人々への興味を持つ姿も見られた。

>>> 担当コーディネーターからのひと言

白上 昌子
社会科の「私たちの生活と工業生産」という単元を基本に、部品の仕組みは理科、ものづくりに対する志は国語や道徳など、環境というテーマながら様々な教科と連動できる可能性のあるプログラムです。

TEL052-881-4349
(NPO法人アスクネット)
HP <http://www.asknet.org/>
info@asknet.org

授業をしたいならこちら

— 授業をおこなった企業の感想

プログラムを検討する中で自社の特色や、歴史、財産(人/技術/環境への取り組みなど)について改めて考えたことは、非常に貴重な機会となりました。企業活動が学校教育にも役立つことに驚き、とても嬉しく思います。子どもたちは私たちが試みた以上に多くのことを感じ、学んでくれたようで、刺激になりました。また拠点所在地の小学生を対象としたことで、地域と会社とのつながりが相互に感じられました。(総務部 社会貢献推進室企画グループ担当者より)

— 授業を受けた子どもの声

●豊田佐吉さんの「私は頭がいいのではない。努力しただけだ」という言葉を聞いて、自分も努力しようと思いました。

●水の出っぱなし、電気のつけっぱなしに気をつけるなど、かんたんなことから始めようと思います。

授業名	お店を出そうプロジェクト
企業名	有限会社ワッツビジョン http://www.clays.co.jp/
コーディネイト団体	瀬戸キャリア教育推進協議会



瀬戸の子どもは瀬戸で育っている！

瀬戸市のキャリア教育事業を進める「瀬戸キャリア教育推進協議会」は、瀬戸商工会議所を中心に、教育委員会や学校関係者、地元企業や商店街などを含め「オール瀬戸体制」で構成されている。「お店を出そうプロジェクト」は、瀬戸の地場産業であるやきもので湯飲みや置物を作った販売するもので、生徒自身が企画から商品開発、収支決算までを実践。総合学習の時間だけでなく、各工程のテーマによって、図工や社会など教科の単元と関連つけて実施することも可能だ。他にも、授業に簡単に組み込める体験型ワークショップの実施など、「瀬戸がまるっとセンセイになるとき」を合言葉に、子どもたちの発達段階にあったプログラムでキャリア教育を実施している。

- 実施地域：愛知県瀬戸市
- 実施学年：小、中学校
- 授業数：30時間
- 必要な設備：特になし

>>> 担当コーディネーターからのひと言

山田 素子
商品企画や広報活動、店舗の設置まで、生徒たちが自主的に問題意識を持ち、活動することを重視しています。これからは学校と企業との仲人役として授業を支援していきます。

授業をしたいなら
こちら

TEL0561-82-3123
(瀬戸キャリア教育推進協議会)
HP <http://www.setocci.or.jp/setocareer/>
yamada@setocci.or.jp

■授業をおこなった企業の感想

このプログラムにはキャリア教育の原点となる要素があります。「ものづくり」のプロセスを通じ、「勇気・元気・笑顔」の合言葉と共に、子どもたちへ自然体験や人への思いやりなど感性の大切さを伝えています。5、6年生がグループで協働する一年がかりのプログラムの準備が進むにつれ、それが学校や家庭生活で日常化され、子どもたちの健やかな成長を見ることができました。こうした子どもたちが将来、地域社会で活躍することを大きく期待しています。

■授業を受けた子どもの声

- なぜ勉強するのか、今の学習が将来どう役立つかわかった。(小学6年生)
- 最初は仲が悪かったが、協力しなければいけないことがわかった。(小学6年生)
- 家で仕事について話す機会が増えた。仕事に対するイメージが変わった。(中学2年生)

授業名	こんな車いす欲しかったん!
企業名	グンジ株式会社 [車いす用自動安全ブレーキG-Guard] http://www.g-guard.jp/
コーディネイト団体	特定非営利活動法人南大阪地域大学コンソーシアム



使う人を想像しながら車いすを企画せよ!

自動安全ブレーキ付きの車椅子を開発・製造・発売するグンジ株式会社からのミッションは、「新しい車いすを提案してほしい」。ミッションを受けた子どもたちは、企画書づくりからプレゼンテーションによる企画提案までを体験。社会が必要となる基礎力を育てることを目的としたこのカリキュラムのポイントは2つ。1つは、何度も考え作り直すことを失敗と捉えるのではなく、より良いものを作る上で壊すことが重要だと知ること。2つ目は、ものづくりは人とモノとの関係、人と社会との関係から生まれるもので、決してモノだけで存在しているのではないことを実感すること。子どもたちにとって、「社会に役立つための自分の活かし方」や「社会の活かし方」を考えるきっかけになった。

- 実施地域：大阪府大阪市(大阪市立東都島小学校)
- 実施学年：小学校5年生
- 授業数：約20時間
- 必要な設備：パソコン、プロジェクターなど

>>> 担当コーディネーターからのひと言

キャリア教育担当者
中間発表後、限られた時間でどうなるかと思いましたが、子どもたち一人ひとりが満足のできる車いすを開発できて、本当に良かったです。

授業をしたいなら
こちら

TEL072-258-7646
(特定非営利活動法人南大阪地域大学コンソーシアム)
HP <http://www.osaka-unicon.org/>
career@osaka-unicon.org

■授業をおこなった企業の感想

「車いすを日頃身近に感じていない子どもたちにとって、当初この題材は難しいかと思われたが、大切な祖父母のために、また自分ではない誰かのことを思いながら子どもたちが一生懸命取り組めたことは、非常に良かった」という現場の方々のお声をいただきました。この授業を通して考え抜く力がついただけではなく、お年寄りや体の不自由な方々への理解が深まったのではないかと、嬉しく思っています。

■授業を受けた子どもの声

- チームで協力できた。ここまでできたのはリーダーのおかげ。
- 大変やったけど、最後発表できてよかった。
- こんな考えたこと、今までなかった!

授業名	ウイナーの手作り体験教室
企業名	日本ハム株式会社 http://www.nipponham.co.jp/group/shokuiku/index.html
コーディネイト団体	NPO法人企業教育研究会



食の大切さを知り自ら作って体感する

日本ハムの社員が学校を訪問。「食べることの大切さ」や「朝食の大切さ」についての知識を深めてもらうことを目的に出前授業を実施している。前半は朝食をとる必要性と、加工食品について学習。後半は調理室でウイナーを作る。生の挽肉にスパイスを混ぜ、「スタッファー」と呼ばれる機械で羊腸に肉を詰め、それをウイナーソーセージの形にねじって成形、ポイルすれば完成だ。最後に、調理して試食する。

普段なにげなく食べている食材が作られている過程や、食卓に届くまでに携わっている人の姿を知ること、食に対する意識と仕事に対する意識が変わる。社員の熱心な指導と、自分で作ったウイナーの味が、何よりも有効な教材になっている。

- 実施地域：全国
- 実施学年：小学校、中学校
- 授業数：3時間～
- 必要な設備：パソコン、プロジェクター、スクリーン、スピーカー、調理室や家庭科室などの調理設備(一式)

>>> 担当コーディネーターからのひと言

深川 愛子
お忙しい先生方にとって実施までの調整がなるべくご負担にならないように考えています。今後は食事のバランスにもう少し触れ、内容の幅を広げて展開できればと思います。

授業をしたいなら
こちら

TEL043-308-7229
(NPO法人企業教育研究会)
HP <http://ace-npo.org/info/nipponham/>
tedukuri@ace-npo.org

■授業をおこなった企業の感想

講義では「私たちの身体は私たちが食べたものでつくられる」ことを伝えたい。体験教室においては、子どもたちにとって身近な食べ物である「ウイナーソーセージ」を作るという体験を通して、食べものを作ることの「楽しさ」と「大変さ」を感じて欲しい。その中から「食」への感謝の気持ち「食」と向き合うということはどういうことを学びとってもらえることを期待している。

■授業を受けた子どもの声

- お肉を腸に詰める時が一番楽しかった。最後に自分たちで作ったウイナーを食べれてよかった。(小学6年生)
- 自分の食生活について考えさせられました。これからは「食べ物で人間が成り立っている」という言葉を頭において、食べるようにしたいと思います。(中学生)

授業名	Dr.フォレストと校庭に出よう!
企業名	積水ハウス株式会社 http://www.sekisuihouse.co.jp/
コーディネイト団体	株式会社キャリアリンク



教師が自由にアレンジできる(ダウンロード型教材)も無償で提供しています。

身近な自然環境から「生き物同士の関わり」を理解する

大手ハウスメーカーの積水ハウスには、庭づくり・街づくりを担当する樹木医の資格を持つ「緑の専門家」がいる。このプログラムの特徴は、その専門家が実際に学校を訪れ、子どもたちに緑と生き物同士の関わりや、自らと自然との関わりが地球環境の保全につながることを考え行動を促す「体験思考型」の環境教育プログラムであること。身近な自然環境である「校庭」の樹木に向き合う機会をつくり、生息する動物それぞれが関わり合うことにより成り立っている生態系や生物多様性の大切さを理解させることを目指した。「緑の専門家」Dr.フォレストから「生き物同士の関わりを説明せよ!」というミッションを受けた子どもたちは様々なワークを通して思考、探究心や発想力など、生きていく上で必要な力を身につけるきっかけになった。

- 実施地域：全国(関西、関東、中部地域)
- 実施学年：小学校4～6年生、中学生
- 授業数：3時間(うち出張授業は2時間)
- 必要な設備：パソコン、プロジェクター、スクリーン、樹木観察ができる校庭または公園

>>> 担当コーディネーターからのひと言

吉澤 秀樹
地域に昔からある在来の植物を植え、様々な樹木と生き物の関わりについて、知識のある緑の専門家Dr.フォレストは、子どもたちにとっても、先生方にとっても魅力のある人物だと言えます。

授業をしたいなら
こちら

TEL06-6251-6001
(株式会社キャリアリンク)
HP <http://www.lab-warp.ne.jp/>
jugyo@lab-warp.ne.jp

■授業をおこなった企業の感想

子どもたちは「生き物同士の関わり」を理解して校庭に出ると「この葉っぱの名前は?」「この木にはどんな鳥が来るの?」など、たくさんの質問をくれます。今まで当たり前のように見ていた身近な樹木や自然環境が、子どもたち自身とどのように関わっているか意識し始めた瞬間だと感じ、一緒にワクワクしています。環境問題を「自分たちの問題」と意識し、自分たちにできることを、生活の中で実際におこなうきっかけになればと思います。

■授業を受けた子どもの声

- シジュウカラが1日にたくさんの毛虫や木の実を食べるのに驚いた。
- 身近で植物を育てることがオオタカを守ることにつながることが分かった。
- 校庭には思ったよりたくさんの木があることに気づきました。

授業名	愛媛県の特産品を販売しよう(販売体験)
企業名	株式会社伊予銀行(地域協力企業代表) http://www.iyobank.co.jp/
コーディネート団体	特定非営利活動法人ベンチャー・アライアンス協会



小学生のキャリア教育はじめての販売体験

授業では「愛媛県の特産品を販売しよう」をテーマに、チームとする会社を作り、児童たちが販売する商品を選択し、ターゲットや販売個数など、チームで協力して事業計画書を作成。また、接客に必要なマナーとお金の取り扱いなどを学習し、商品の特徴をお客様に伝える工夫を考え、地元商店街で実際に販売を体験する。販売終了後は、収支決算書の作成を行い、自分たちの活動の振り返りを発表します。このプログラムは、県内産品を通して、地域や経済の流れを理解しながら協力することの大切さやコミュニケーション方法を学ぶことができる学校や地域が一体となった取り組みだ。

- 実施地域：愛媛県松山市
- 実施学年：小学校5年生
- 授業数：19時間
- 必要な設備：県内の地域産品

>>> 担当コーディネーターからのひと言

都築 泰彦(株式会社伊予銀行)
各関係者に対して、事前に「キャリア教育の方向性や狙い」の打合せを行ない、お互い理解を深めたうえで、無理のない形で進めていけるようコーディネートすることが必要であると感じました。

授業を
したいなら
こちら
TEL089-968-8400
(特定非営利活動法人ベンチャー・アライアンス協会)
HP http://www.vaa.jp/

授業をおこなった企業の感想

伊予銀行では、CSR活動の一環として「金銭教育」に積極的に取り組んでいます。普段は小学生高学年の児童には「銀行のしごと」や「お金の正しい使い方」などを中心に説明することが多いのですが、今回の授業では「事業計画書」「収支決算書」などについて説明しました。非常に難しいテーマであり不安でしたが、何とか理解してもらえたようです。今後の反省点として、もう少し身近な例などを引用して説明する必要があると思いました。

授業を受けた子どもの声

- 仕事は、自分だけでなくみんなのためにすることが分かりました。
- もうかるためだけでなく、お客さんに喜んでもらうことが、販売では大切なことだと思う。
- 仕事は、むずかしいこと。勇気がいる。

授業名	社長ミッション・旅行商品開発プログラム
企業名	株式会社エア沖縄 http://www.air-okinawa.co.jp/
コーディネート団体	有限会社オーシャン・トゥエンティワン



「旅行ツアー」を商品開発優良企画はの商品化も

社長が学校を訪れ、生徒たちにミッションを提示。「夏休みの家族旅行プラン」を企画提案して欲しい」との依頼を受け、情報収集、商品企画・ニーズ調査、販売価格設定などの一連の活動を行うプログラム。活動の過程で、本社を訪れたり、各部署員らの熱心なサポートを受けたりする中で、会社の仕組みや仕事のやりがいなどに触れると同時に、真剣な指摘を受けることで、仕事の厳しさも目の当たりにする。また、活動を実施する中で、課題発見力や課題解決力を中心とした社会人基礎力を育む。提案のためのプレゼンテーションには、社長をはじめ企画部・営業部の社員が出席し、プロの視点での審査・講評を行う。商品化も約束されるため、生徒たちの取り組みにも熱が入る。

- 実施地域：沖縄県
- 実施学年：中学校1年生
- 授業数：15～30時間
- 必要な設備
情報収集用：インターネット環境
プレゼンテーション用：パソコン

>>> 担当コーディネーターからのひと言

翁長 有希(おながゆうぎ)
企業側の真摯で、時に厳しい姿勢に、生徒たちは自分たちの努力や能力を認められることに喜びを覚え、「自己有用感」につながったことが最大の成果でした。

授業を
したいなら
こちら
TEL098-859-8742
(有限会社オーシャン・トゥエンティワン)
HP http://www.ocean-21.co.jp/
info@ocean-21.co.jp

授業をおこなった企業の感想

「社長の給料はいくらですか?」いきなり質問でした。「僕は母にありがとうって言ったことがない、家では恥ずかしいけど場所が変われば言えるかもしれない」生徒らは自分の家庭と友達の家との共通点や違っていることを認識共有し、「お父さん、お母さんに感謝の気持ちを表す」ことを目的にした家族旅行を企画。自分の意見を言う。人の意見を聞く。分からない事は尋ねる。そして理解する。子どもたちは社会で生きていける力をドンドンつけていると実感しました。

授業を受けた子どもの声

- 今勉強しているのは自分の将来の為にと分かってはいてもなかなか実感できなかったのですが、今回少し実感しました。
- 仲間と協力してひとつのことを成し遂げ、本当の仕事の見学をできた。仕事の素晴らしさを体験できた。まだ将来の夢は見つかっていませんが、サービス業も考え始めた。

授業名	こんな家族旅行欲しかってん!
企業名	近畿日本ツーリスト株式会社 http://www.knt.co.jp/
コーディネート団体	特定非営利活動法人南大阪地域大学コンソーシアム



家族旅行の企画を通して考え抜く面白さを実感

社会に出て、どんな仕事に取り組む際にも必要になってくる考え方「PDCAサイクル」。プログラムでは、新しい家族旅行の企画を通して、社会で必要となる基礎力を育成する。さらに「PDCAサイクルの要素を思考のプロセスとして構造化したものを思考リテラシーと定義」し、「思考リテラシー」を体験し、獲得するところにカリキュラムの目標を置いた。プログラムは、①近畿日本ツーリスト株式会社からのミッション。夏休み泊3日家族旅行を提案してほしい。②家族を徹底分析! ヒアリング調査③企画書作成④旅行プランの作成⑤グループで討論⑥中間発表⑦ブラッシュアップ⑧最終審査会といった流れで実施した。プログラムを通して子どもたちは、粘り強く、徹底的に企画を考え抜くことをやり遂げた。

- 実施地域：大阪府大阪市(大阪市立東都島小学校)
- 実施学年：小学校6年生
- 授業数：約20時間
- 必要な設備：パソコン、プロジェクターなど

>>> 担当コーディネーターからのひと言

キャリア教育担当者
6年生は昨年度ココヨS&T株式会社にご協力いただきランドセル企画を行っています。昨年度に得た基礎力を活かし、今年も本当に立派な成果をあげることができました。

授業を
したいなら
こちら
TEL072-258-7646
(特定非営利活動法人南大阪地域大学コンソーシアム)
HP http://www.osaka-unicon.org/
career@osaka-unicon.org

授業をおこなった企業の感想

カタチのない「旅行」を企画することは、我々プロでも難しいこと。それを小学生に出来るのだろうか?という当初の予想を裏切り、非常にユニークかつ実現性の高い商品を提案して頂きました。家族へのヒアリングを的確に分析して企画された「家族旅行」はどれもあたたかく魅力的な内容。プレゼンも旅行に対する期待感を高揚させてくれる見事さでした。修学旅行の取扱から創業した弊社として、授業のお手伝いできたことを光栄に思います。

授業を受けた子どもの声

- 昨年も大変だったけど、今年ももっと難しくなった。
- 親から聞いた話が参考になった!
- 自分の作った家族旅行が本当に実現したら嬉しい。

授業名	ドリカムスクール 「わが町のスポーツチームを応援するウェアやグッズを企画しよう!」
企業名	株式会社デサント http://www.descente.co.jp/
コーディネート団体	JAE (NPO法人日本教育開発協会)



教えることを通じて自社の魅力を再認識

創業75年の老舗スポーツウェアメーカー・株式会社デサント。これまでは商品企画を通じて、コーディネート団体のJAEと共に仕事の面白みや自社の商品の魅力を発信する授業をおこなってきた。平成21年度からは社員研修としても活用しようと全社的な取り組みに拡大。そこでデサントが新たに取り組んだのは自社がウェアを供給しているプロサッカークラブ「ガンバ大阪」と連携した授業だ。「わが町のスポーツチームを応援するウェアやグッズを企画しよう」というミッションを受け、ガンバ大阪の橋本選手が講師として教壇に立ったことにより、生徒たちは使う人考えた商品企画ができたようだ。また授業をおこなった若手社員たちにとっても、仕事へのモチベーションの向上や、自社や商品、自分の仕事の価値を再確認するきっかけにつながる活動となった。

- 実施地域：大阪府茨木市(茨木市立彩都西中学校)
- 実施学年：中学校1年生
- 授業数：19時間
- 必要な設備：プロジェクター、スクリーン、PC、画用紙、マジック

>>> 担当コーディネーターからのひと言

池田 直子
1つのウェアが生み出され、お客さんの手元に届くまでの流れはどのようになっているか。実際のウェアに触れ、お話を聞き体験し、そのやりがいと苦労を実感した授業でした。

授業を
したいなら
こちら
TEL06-6100-3432 ※4月末、移転予定
(JAE【NPO法人日本教育開発協会】)
HP http://www.jae.or.jp/
info@jae.or.jp

授業をおこなった企業の感想

- 発表を評価するという役割を通して、プレゼンの大切さに気づくことができました。商品の質が高くても、上手にアピールできなければ売れないのだと改めて実感しました。(デサント担当者)
- 生徒のみなさんの柔軟なアイデアや意見に驚きました。伝えたいことをまとめる力、みんなの前で発表する力など、私自身が学ばせていただいたことも非常に多かったです。(ガンバ大阪担当者)

授業を受けた子どもの声

- 自分が考えたものを商品として売るのは、商品の特徴などを人にわかりやすく伝えなければならないということに気づけました。
- 商品開発をする時にみんなの意見がまとまらず大変でしたが、協力し合う大切さを知ることができました。

